

デカルトにおける理性と感覚(5)

～もう一つの〈真理の探求〉について①～

村 上 吉 男

1-4-1 新たな精神とは何か。

筆者は前回引用したいくつかの原文⁽¹⁾の私的解釈において、デカルトのいう精神には、いわゆる〈真理の探求〉(心身二元論)の〈esprit〉や〈日常的用法〉(心身合一)の〈âme)がそれぞれ個別にあるだけでなく、さらにこの〈esprit〉と〈âme)とを複合させた新たな精神(esprit)があると認めることができた。とすれば新たな精神は、筆者にとって、たんにデカルトの三番目なる精神に数えられてすまされるどころか、むしろそれ自身をもって、いわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉や〈日常的用法〉の〈âme)が個々に〈同じ一つの精神〉であると捉えてよいように、かかる〈esprit〉と〈âme)とを織り込み語られる〈同じ一つの精神〉に、または筆者のいうもう一つの〈真理の探求〉(真の心身合一)をさすespritにならざるを得ないであろう。

いいかえるとこのespritは、当のespritで超自然的な〈独自の理性〉の自然的諸能力(身体感覚や想像または〈âme)の自然的理性)への働きかけなるかかわりを有して、新たな精神あるいはそれとしての〈同じ一つの精神〉になるとみなされるのはむしろのこと(かかる関与を有するespritはまた身体(âme)を結合させるが、しかしこれこそ真の心身合一をめがけるといえる新たな精神である)、さらにそうあるかぎり、そこにはすでに〈esprit〉ばかりか、〈âme)の諸能力も含まれていると理解し得るからして、超自然的悟性(知性)や超自然的理性が〈作為観念〉の諸能力として(わたし×神×事物)たる各〈生得観念〉を獲得すべく〈作為する〉ところでのいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉のこの用法も、ならびに〈現実の事物〉を表象する身体感覚や想像が〈外来観念〉の自然的諸能力として働きかけられたり、もっぱら自然的理性が〈作為観念〉の能力としてその〈外来観念〉をとき[・]に[・]作為したりするところでの〈日常

的用法〉の〈âme〉の各用法さえあわせ見出せることを示唆させずにいないであろうということになるのである。

前段のことは筆者にあって、たとえば以下に掲げるⓧ①で明かし得るし、この引用文自体は前回取り上げた⑪②⁽²⁾のデカルトの主張とおよそかさなりあうように察知される。

ⓧ①Mais, d'autant que l'idée véritable du triangle était déjà en nous, et que notre esprit la pouvait plus aisément concevoir que la figure moins simple ou plus composée d'un triangle peint, de là vient qu'ayant vu cette figure composée nous ne l'avons pas conçue elle-même, mais plutôt le véritable triangle. Tout ainsi que quand nous jetons les yeux sur une carte où il y a quelques traits qui sont disposés et arrangés, de telle sorte qu'ils représentent la face d'un homme, alors cette vue n'excite pas tant en nous l'idée de ces mêmes traits que celle d'un homme.⁽³⁾

しかし、三角形の真の観念がすでにわたしたちのうちにあって、わたしたちの精神はこの真の観念を、書かれた三角形の合成図形よりもさらにたやすく理解し得ていただけに、それでわたしたちはこの合成図形をみた際に、その合成図形そのものをではなく、むしろ真の三角形を理解したわけである。このことはまったく、わたしたちがいくつかの線が人間の顔を描くように案配され引かれた紙片に目をとめるそのとき、この目はわたしたちのうちに、それらの同じ線の観念よりはむしろ人間の観念を生じさせるのと同様なのである。(傍線部分は筆者)

前記していた三つの観念（筆者の見方では四つの観念）をば、引用文ⓧ①の前半の文章に当てはめ確認すると、まず〈生得観念〉は、〈三角形の真の観念がすでにわたしたちのうちにある〉と、次に〈作為観念〉は、〈むしろ真の三角形を理解した〉と、そして〈外来観念〉は、〈この（書かれた三角形の）合成図形をみた〉と記される各部分にかかわってであろう。するとこの前半の文章からは、筆者にとって〈生得観念〉ならびに〈作為観念〉と〈外来観念〉とがなぜにいっ

しよに(同時に),または前者二つの観念があたかも後者の観念を前提するように語られなければならないか,いいえととかかる文章がいわゆる〈真理の探求〉を意図させるそれと捉え得るならば,どうしてそこに〈外来観念〉のことが記述されねばならぬのがさらなる問題になるのである。

いわゆる〈真理の探求〉には〈生得観念〉と,およそ超自然的悟性(知性)や超自然的理性の働きかけをもって成る〈作為観念〉とが想定されているだけではなかったのか。その通りであって,この〈作為観念〉が〈すでにわたしたちのうちに×生得観念〉としてある〈わたし×神×事物〉のそれぞれに達せんと〈作為する〉ことなのである。だが引用文㊦㊱中の〈書かれた三角形〉なる事物は,それこそ〈生得観念〉の一である〈事物〉に相当するとみなされるのか。否であろう。超自然的悟性(知性)や超自然的理性が〈書かれた三角形〉なる事物を〈作為する〉ことはこれまで何度か指摘したように⁽⁴⁾,いわゆる〈真理の探求〉においては不可能なことになる。〈書かれた三角形〉なる事物とは,〈外来観念〉を生じさせよう身体の感覚(sens)や想像(imagination)あるいは㊦㊱の〈みる〉ということにあっては(âme)の〈感じる(sentir)〉にかかわってある現実の(自然的)事物にほかならない。しかるにいわゆる〈真理の探求〉における〈生得観念〉としての〈事物〉は,繰返しいえば超自然的悟性(知性)や超自然的理性によって,要するにこれらの成す〈作為観念〉によって獲得される観念的(知的)〈事物〉でしかない,とどのつまりは身体sensやimaginationあるいは㊦㊱の〈みる〉ということにあっては(âme)のsentirに委ねられたり由来したりする事物であり得ないことになる。

かつこの〈生得観念〉をもちあわせ,〈作為観念〉を生み出す精神は,引用文㊦㊱に〈notre esprit(わたしたちの精神)〉と記されるからして,(esprit)なのであり,(âme)ではもはやなからう。すなわちそこで〈わたしたちの精神〉はこの真の観念を... さらにたやすく理解し得ていたと語られるだけならば,この(esprit)は〈三角形の真の観念〉たる〈生得観念〉を有するばかりか,これを〈理解する〉超自然的悟性(知性)や超自然的理性なる諸能力の働きかけで〈作為観念〉をかたちづくり得る精神でなければならぬであろう。要は(esprit)こそ〈生得観念〉と〈作為観念〉を兼備されずに成り立たない精神であるということである。だからこの条件のもとに,またたとえば(Je pense, dit-il, donc je suis; voire même je suis la pensée même, ou l'esprit. (わた

しは思惟する、それゆえわたしは存在する、それどころかわたしは思惟そのものの、あるいは精神である、とデカルトがいう))⁽⁵⁾ 指摘において、引用文ⓧ①の全体のなかの単語〈わたしたち(は)(の)〉は、これらすべてを(esprit)に換言しその意味で捉えられるにちがいない。

ところがである。デカルトが引用文ⓧ①に同時に〈書かれた三角形〉と記す以上、筆者はこの〈外来観念〉のことがいったい、〈わたしたち〉すなわち個人の(esprit)のことに関係するとみられるかどうかをここで今一度質さずにおれなくなる。〈外来観念〉は〈日常的用法〉における〈âme〉が、また〈生得観念〉と〈作為観念〉はいわゆる〈真理の探求〉における(esprit)が生み出す各観念であったのは確かである。だがこれらの観念がこの引用文にても⁽⁶⁾ともに語られてあることはこれらの観念を上記の用法別にでなしに把握せねばならぬことを示唆させるからして、筆者はその〈âme〉と〈esprit〉は関係せざるを得ないとみだし、それには新たな精神 esprit⁽⁷⁾ が不可欠になると主張したのである。

しかしながら新たな精神とは、各用法における〈âme〉と〈esprit〉をとともにさせるだけの関係で名付けられた精神ではない。いっしょにしたところで、そのままでは両精神が個々にあるしかない精神、結局は両精神にいかなるつながりもみつけれはしない精神なのであって、そうした精神は新たな精神ということができない。新たな精神は、両精神を有機的にかかわらせていう精神、だから両精神がそれぞれ個別にあるのではない精神である。だがこのつながり(それはもとより〈独自の理性〉において可能になる)を有するとみることをもって、新たな精神はそれこそはじめて、それ自体にいわゆる〈真理の探求〉の(esprit)と〈日常的用法〉の〈âme〉のことさえ含ませ得ると捉えられてくるのである。このことは、新たな精神がデカルトのいう精神の基本に位置することを、そのときかの(esprit)や〈âme〉も新たな(同じ一つの精神)なるなかに組み入れられることを意味させずにいいない。だから新たな精神にあっては、たとえばいわゆる〈真理の探求〉での〈事物〉も知的〈事物〉として〈理解〉したり、〈日常的用法〉での現実の事物もまずは感覚的想像的事物として受け入れられたりすることが可能になる(かつ新たな精神がデカルトのいう精神になくば、ⓧ①は〈不明瞭、難点、矛盾〉を有するしかなかろう)といえるのである。

1-4-2 新たな精神においてこそ、デカルトのいう諸能力のすべてが活かされる。

筆者はこれまで、引用文㊦①に記される精神は、それが〈書かれた三角形〉という〈外来観念〉(現実の事物)にかかわると断じたがゆえに、たんに〈生得観念〉と〈作為観念〉を見出せるいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉にとどまるのではなく、およそデカルトをしてさえ新たな精神を意図せしめよう esprit であり、またデカルトのいう精神の基本に捉えられる結果、いわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉と〈日常的用法〉の〈âme〉の各用法を単独(ないしは個別)のままでなしに取り込まずにいないとみてきた。だがさらに、かかる見方は次なる付記事項の証明によって定かになる、だからこそ引用文㊦①もこの付記事項のいずれかに従わせ分析されねばならぬということができるのである。

付記事項としての一は、デカルトのいう精神が新たな精神とみなされないかぎり、デカルトの各作品に語られるあらゆる能力がいっしょに活かされてはこないこと、また一は、その全能力を一である脳に受け入れさせたり、この脳で働きかけたりする新たな精神もまた〈同じ一つの精神〉、註(5)によっては同一人の〈わたし〉同じ一つの〈思惟〉、筆者からすれば、それこそ唯一の精神・わたし・思惟でしかないこと、そして一は、新たな精神は〈réalité objective〉⁽⁸⁾と〈réalité actuelle ou formelle〉⁽⁹⁾ ないしは〈réalité formelle〉⁽¹⁰⁾ をともに含ませて成り立つことにある。要はかの見方が上記付記事項を明かさずにいまだ正当を得ないということである。

かくいねばならなかったのは、新たな精神がデカルトのねらいであり、それだからたとえばシモーヌ・ヴェーユに〈不明瞭、難点、矛盾〉になると指摘されるに及んでも、この新たな精神たるデカルトのねらいなしに、デカルトのいう精神の特徴が、つまりその認識論的思想の特徴が何ら浮かび上がってはしないと察知し得るからである。すなわち新たな精神の意図なかりせば、デカルトの認識論的思想は、プラトンやアリストテレスのいう各認識論的思想を乗り越えられるはずがないとみることができるのである。両者の各認識論的思想を乗り越えられないとなると、デカルトの認識論的思想は、新たな精神 esprit 以外の〈esprit〉や〈âme〉なる各精神に関する認識論的思想があることを、いいかえるといわゆる〈真理の探求〉や〈日常的用法〉の各用法ごとのその認

認識論的思想があることを示唆させるほかないであろうし、さらにデカルトのかかる各認識論的思想がプラトンやアリストテレスの各認識論的思想とまったく同一でなくとも、少なからずその理性や感覚については参照したといえるようになる、プラトンやアリストテレスの各認識論的思想がデカルトのいう二つの精神に、しかも各精神が精神とされる以上は各〈同じ一つの精神〉としてあらねばならぬ精神にそれぞれ個別に当てはまるからして、デカルトの〈esprit〉や〈âme〉における各認識論的思想は両者の各その二番煎じで垂流にならざるを得ないことを否めないであろうというしかもはやなくなる。なおまたこの場合にも、あのシモーヌ・ヴェーユがデカルトに対していう〈見掛け倒しの思想家〉たる言葉は適合するにちがいない。

しかしすでに触れたごとく¹¹¹、デカルトは新たな精神 esprit における認識論的思想の特徴といってよい〈独自の理性〉を打ち立てたと筆者がみることによって、プラトンやアリストテレスの各認識論的思想を乗り越えていたということが明白となる。〈独自の理性〉がデカルトに語られることは、前記付記事項の一のかかる例文（ないしは註(9)の〈réalité actuelle ou formelle〉）をもってのちに解明する（次回以降）が、この〈独自の理性〉があるせいで、デカルトがもっとも強調したかったであろう認識論的思想はそれ自身に〈esprit〉や〈âme〉の各認識論的思想すら複合させずにおかなくなるからこそ、かつ各認識論的思想が〈独自の理性〉でつながれ一つに捉える認識論的思想がみえてくるからこそ、これに対応しよう精神はいまや〈esprit〉や〈âme〉であり得ず、新たな精神 esprit にならざるを得ないだけは確かなことになるわけである。それゆえデカルトのいう精神は、筆者にすればいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉や〈日常的用法〉の〈âme〉の各認識論的思想（または両思想にあらわれる全能力）を〈独自の理性〉のもとにいっしょになしたり、このとともにという以上、しかしてこれも精神とみられる以上、〈同じ一つの精神〉でなければならなかったりする新たな精神 esprit において唯一代表されるばかりか、新たな精神 esprit にあって一となった認識論的思想での全能力が活かされる、たとえば〈esprit〉ではあたかも飾りのごとく配置されるにすぎない imaginer や sentir なる諸能力さえ実際活かされることになる¹¹² ということができるのである。そして新たな精神がデカルトのねらいとする精神であればなおさら、このことをデカルト最大の〈不明瞭、難点、矛盾〉と見抜いていたあのシモーヌ・ヴェー

ユ⁽¹³⁾ は、この場合をしてデカルトを哲学者と命名せずに、明確に〈見掛け倒しの思想家〉といわしめるように筆者には断じられる。

するとそこからはまた、以下のごときことがみえてくる。すなわち、デカルトのいう感覚 (sens) とカントのいう感性 (Sinnlichkeit) の比較検討は次回以降の機会に譲る⁽¹⁴⁾ にしろ、ここで繰返し、新たな精神をばデカルトのいう精神の基本に据える立場に立ち強調するならば、この新たな精神は何より、超自然的理性で各知的〈わたし×神×事物〉の完璧を期するいわゆる〈真理の探求〉の (esprit) と、たとえば感覚 (sens の sentiment 化)⁽¹⁵⁾ や〈自然的理性 (raison naturelle)〉⁽¹⁶⁾ のそれぞれ⁽¹⁷⁾ で外的現象たる現実の事物の完璧をいまだ期し得ない〈日常的用法〉の (âme) とを含み込む精神 esprit であり、かつそこにこの現実の事物の完璧を期する〈独自の理性〉さえ見出されると捉えたがゆえに、〈独自の理性〉が現実の事物の完璧を期するうえで、上記のうちの〈日常的用法〉に関係せずにおれない精神 esprit でもあろうことがみえてくる。それだから、こうした関係を保有する esprit なる思想は、いいかえるとデカルトのこうした認識論的思想は、さらにデカルトの身体感覚 (sens) と esprit の〈独自の理性〉の一たる、後段に記す〈知的愛〉によって、身体と esprit (精神) が合一される思想は、むしろ近代以降にあっては、カントの感性を起因にして組み立てられる認識論的思想に、あるいはカントに予想し得る心身合一の思想に比べて、これらより先立った各思想に位置づけられようということができるのである。

かかる見方を簡単に否定できないのは、esprit での〈独自の理性〉がⓧ①にあっていう身体感覚 (ほかに身体想像も該当しようが) に関するとしたデカルトの認識論的思想において、この〈独自の理性〉が筆者のいうもう一つの〈真理の探求〉の〈思惟〉という範疇の能力に相違ないと見定めるならば、筆者はこの〈独自の理性〉を、〈思惟〉の一樣態である〈知的愛〉⁽¹⁸⁾ と名付け、〈知的愛〉を〈独自の理性〉の一としてよいであろうとみることに、それゆえここからこの新たな精神 esprit で、たとえば身体感覚と〈知的愛〉との心身合一 (これこそ筆者のいわんとする真の心身合一であるが、この心身合一は〈知的愛〉が以下に記す引用文での身体想像との関連によっても成ると予想できる) が可能になるとみることに、〈知的愛〉とは前引用文①②⁽¹⁹⁾ の〈思惟〉の諸能力を例にすると、〈愛する×憎む〉や〈感じる〉に相当していようが、それでもこれ

らの能力はもはや〈日常的用法〉の自然的諸能力にあらずして、超自然的諸能力と語られねばなるまいし、しかも〈知的愛〉では〈知的〉となす超自然的理性たる〈独自の理性〉そのものの要素より、〈愛する×憎む〉や〈感じる〉要素の方が強く前面に出て勝るとみること⁽²⁰⁾に、また自然的理性が身体感覚を〈作為する〉という当の自然的理性にさらに関係するのは、〈知的愛〉なる〈愛〉の方ではなしに、純粋な超自然的理性として理解されようそれこそ〈独自の理性〉そのものでしかないとみること⁽²¹⁾に、しかし、それで自然的（身体的）理性にかかわる新たな精神 *esprit* の〈独自の理性〉がいかにか発揮されようと、この身体と精神の両理性がゆえに、両理性同士のかかわりによって心身合一が成立するは不可能であるとみること⁽²²⁾に、そして一方に記しおいたカントの認識論的思想に関しては、それを、カントのいう悟性 (*Verstand*)・知性 (*Intellekt*)・理性 (*Vernunft*) が何かをここに問いかつ明かさずとも、感性が一にデカルトのいう身体感覚と同じであるとの理解にて捉えられとみること、だから、もとよりカントにあつても悟性・知性・理性が配置されるといってよい精神 (*Geist*) に、感性が受け入れられる関係にある、つまり身体感覚は精神の感性としてあるとみること、そうなると精神のかの諸能力が超自然的能力（理性は超越的能力とされる）であるか、わけでも理性が感性による現象（現実の事物の表象）に働きかける（〈作為する〉）かどうかの解答は別にして、カントの認識論的思想の骨組みはおおよそ〈日常的用法〉の〈*âme*〉ではない、新たな精神でしか確認できないデカルトの、現実の事物が身体感覚を通して精神にかかわるといふ認識論的思想に相似してくるよう構想されとみること、それゆえ身体 (*corpus*) と精神は関与せざるを得ないごとく見受けられる（ただしカントの認識論的思想に〈知的愛〉に見合う能力があるかどうかであるが）うえて、カントにも一応心身合一の思想が窺えとみることにあるからである。

(A) 〈日常的用法〉の〈*âme*〉の主要な能力とは、かつその〈*âme*〉をして
〈同じ一つの精神〉たらしめるとは何か

とまれ、筆者がここにきてようやく、新たな精神におけるすべての能力を、先きの引用文⑧①で指摘した〈外来観念〉と〈作為観念〉に対して問うことができるのは、新たな精神のみがもとより〈日常的用法〉の〈*âme*〉やいわゆる〈真理の探求〉の〈*esprit*〉の各主要な能力をあわせ有するからであるといえた

がゆえに、上記各観念を小見出し(A)または(B)(C)⁽²⁵⁾の前半の表現に託するなかで、各観念にかかわるこの主要な能力をこれから(A)(B)(C)の順で各個別にまとめてみるのが課されてこなければならないのである。

精神の諸能力とは一般的にいつて、夏目漱石の『草枕』の冒頭句⁽²⁴⁾を例に出すまでもなく、その知性(悟性)または理性、感情または情動や情念と意志をはじめとするばかりか、感覚(感性)⁽²⁵⁾、想像と記憶を含めて語られるであろう。そして当のデカルトが上記諸能力の働き⁽²⁶⁾全体をさして〈思惟(する)〉と断じたことは、すでに繰返し指摘してきた⁽²⁷⁾通りなのである。だから〈esprit〉だけではなく、〈âme〉にあっても諸能力の働き全体をさして、かつまた一括していう〈思惟(する)〉が不可欠になる⁽²⁸⁾と同時に、その〈âme〉が身体感覚や想像と結びつくことでは、身体感覚や想像たる諸能力はかかる〈思惟(する)〉に関係し加えざるを得なくなる⁽²⁹⁾以上、そこに留意せずに、(A)の前半の表現は説明されはしないのである。

以上のことを、ここで〈外来観念〉もあるとした㊦①の引用文に立ち戻って考察していこう。㊦①の傍線部分には、㊦〈わたしたちはこの合成図形をみた〉と、㊦〈この目はわたしたちのうちに、それらの同じ線の観念...を生じさせる〉とある(ただし㊦は以下の本文に記すように、ひとまず㊦と同じ内容をさすと捉えおく)。すると㊦や㊦の内容は視覚たる身体(器官)と無関係でないことを、その点から〈合成図形をみた〉または〈それらの同じ線...を生じさせる〉に発する観念は〈外来観念〉であるほかないことを示唆させる。しかし〈外来観念〉は身体感覚や想像とかかわりなしにもたらされはしない。しかもこのことを可能にする精神は〈esprit〉ではなく、〈âme〉であるがゆえに、〈日常的用法〉としての㊦や㊦の〈わたしたち〉あるいは〈思惟〉なる〈âme〉を意味させるしかないのである⁽³⁰⁾。

しかし〈âme〉が〈思惟〉とみなされる場合、その〈思惟〉は身体感覚や想像に対応し働きかけよう〈âme〉の〈感じる〉や〈想像する〉という〈思惟〉のみにかぎられているのではない、別言すると〈日常的用法〉は何も〈感じる〉や〈想像する〉だけで成り立つのではないことが同時に想起されるべきである。要するに〈日常的用法〉には、繰返してでもいい㊦①と㊦②⁽³¹⁾の〈理解する〉能力のたとえば〈自然的理性〉も、あるいは㊦①の〈合成図形をみた際に、その合成図形そのものをではなく、むしろ真の三角形を理解した〉と記さ

れるなかでの能力もこの〈思惟〉に組み入れられてあるということなのである。だがデカルトのいうこの〈自然的理性〉はいわゆる〈真理の探求〉ではなくに、〈日常的用法〉の〈*âme*〉の一能力であることが再確認されるならば、かかる〈理解する〉はむしろ〈真の三角形を理解した〉という当の〈理解する〉能力ではないことが了解されるはずである。なんとすれば⊗①の〈真の三角形〉は、もともと身体と結びつく〈自然的理性〉とは無関係なのであり、かつ〈生得観念〉たる〈三角形の真の観念〉としてもなければならぬがゆえに、筆者のいう超自然的理性での〈理解する〉または〈作為する〉によって獲得されるしかないとだけはひとまずいえるからである（そうすると上記の引用文中のとりわけ〈むしろ真の三角形を理解した〉という〈理解する〉能力は何か、この能力が〈真の三角形〉にかかわると読むことができないのかが、だから問われてくるのである）。

しかし〈*âme*〉での〈理解する〉が〈自然的理性〉によると捉えたにせよ、筆者はこの〈思惟〉が〈*âme*〉にあって、いかなる役にも立ち得ないのでないことを知る。その〈理解する×思惟〉は〈みた〉に発する〈外来観念〉に働きかける〈思惟〉にも、とどのつまり〈外来観念〉に〈理解する〉を注がせたりして、その〈作為観念〉を作り出す〈思惟〉にもなることが可能なのである。なるほどデカルトは〈合成図形そのものを（理解した）のではな（い）〉と述べる。だがこの引用の前提に〈合成図形をみた〉がくるならば、引用にはその〈外来観念〉がもたらされたり、さらに〈みた×合成図形〉（〈外来観念〉）を〈理解したのではない〉にしる、この〈合成図形〉から〈三角形〉であると判断し認める、何らかの〈作為する×作為観念〉が生み出されたりするともかぎらないことは無視されてはならないであろう。このことは筆者がすでに、〈日常的用法〉に二用法ありと、またこの〈作為観念〉を四つ目の観念としてみると語ったゆえんになる。しかしながらその〈作為する〉はデカルトにおいて、身体感覚や想像と結びつかずにいないから、たとえば〈理解する×*âme*〉の働きかけにもかかわらず、完璧な〈理解する〉には至らない。そこでこの能力は〈真の三角形を理解した×作為する〉ことになり得ないわけである。ただ筆者は、デカルトが諸作品に、確かに〈作為する〉に不可欠な〈自然的理性〉ばかりか、自然的悟性（知性）⁽³²⁾ という諸能力があることを書き記すに反し、これらの能力に発しよう〈作為観念〉のことをば明記しないことに気づかされる。それだ

から〈作為観念〉ありとは筆者の短慮な読み⁽³³⁾にすぎなくなろうが、しかし〈作為観念〉との明記なくば、これらの能力はいったい何を物語るために用いられるのか、また究極のところ、デカルトの〈âme〉としての認識論的思想自体は完全に表記されることにならないのではなかろうかということになる。

ところで、前段までの〈âme〉の自然的悟性（知性）や自然的理性による、たとえば〈きわめて明晰に判明に理解する〉⁽³⁴⁾にふさわしい〈理解する〉は、この各能力からみて、身体的感覺や想像に〈直接〉に働きかける〈作為する〉にあらずに、〈âme〉内ですでに〈外来観念〉となった身体的感覺や想像に〈作為観念〉を作り出すようにかわるからして、この身体的感覺や想像に対しては〈間接〉に働きかけるしかない〈作為する〉ことになる。他方、自然的悟性（知性）や自然的理性の範疇の能力として捉えられよう〈判断する〉や〈意志する〉は、ときに〈情念〉を形成するうえで身体的感覺や想像に〈直接〉に⁽³⁵⁾、わけても〈意志する〉にあつては、ときに〈記憶〉を形成するうえで身体的感覺や想像に〈間接〉に⁽³⁶⁾働きかけるという〈作為する〉ことになる。

それにしても前段中の〈外来観念〉とは何か、ここにまとめておく必要がある。〈外来観念〉とは、身体的感覺や想像がおのおの〈受動〉として、そのまま〈âme〉に受容されて、〈âme〉における〈sensのsentiment化〉（感覚）⁽³⁷⁾や〈imaginationのimagination化〉（想像）になる場合の各観念をはじめとして、〈âme〉の〈感じる（sentir）〉や〈想像する（imaginer）〉がそれぞれ、前段に記した〈理解する（concevoir）×判断する（juger）×意志する（vouloir）〉と同様に〈感じる〉や〈想像する〉が〈直接〉か〈間接〉に身体的感覺や想像にかかわるかは以下に記すし、かつのちに詳述する予定である）、〈能動〉として働きかけて生み出される場合の各観念をさしてくる。すなわちこの〈能動〉による〈外来観念〉は、まず〈感じる〉が〈腺H〉において身体的感覺に〈直接〉働きかけるにあつては、〈sentirのsentiment化〉⁽³⁸⁾たる〈感覚〉の観念であり、また〈想像する〉が〈腺H〉において身体の想像に〈直接〉に働きかけるにあつては、〈imaginerのimagination化〉たる筆者のいうたんなる〈想像〉⁽³⁹⁾の観念であり、そして〈感ずる〉が〈腺H〉ではなく、〈外的感覺器官あるいは脳の内表面〉⁽⁴⁰⁾において、しかも身体的感覺や想像のどちらにも〈間接〉に働きかけるにあつては、〈情念〉の観念であり、また〈想像する〉が〈外的感覺器官あるいは脳の内表面〉において、これも身体的感覺や想像のどちらにも〈間接〉

に働きかけるにあつては、身体的記憶という〈想像〉の観念であるということになる。これらの観念はそれぞれ、〈感じる〉や〈想像する〉の各發揮によって、〈直接〉ではむしろんのこと、〈間接〉でも（認識の起こり）として瞬時に〈âme〉に生み出されてこよう⁽⁴¹⁾（かかる各發揮は少なくとも同時または同時間での發揮ではない）。要するに筆者に、〈感じる〉や〈想像する〉が〈働きかける〉と以上に記されつつも、そのことはしかし、〈作為する（作り出す）〉以外のことを示唆させずにおかないのであって、これこそ〈外来観念〉たり得るということである。

そこでまたここに、前段に掲げた〈âme〉の諸能力がいかなる事由において、〈直接〉や〈間接〉に区別されるのか整理しておく必要が生じる。その際この〈âme〉いいかえると心身合一にとって、〈直接〉や〈間接〉は何より身体の感覚や想像が、そして身体の感覚や想像にまずはかかわるにちがいない〈âme〉の〈感じる〉や〈想像する〉が同じ〈âme〉のたとえば前記した〈理解する×判断する×意志する〉ことより優先されて問われねばならない。以上を前提にして、筆者には〈直接〉とは、まず身体の感覚や想像が〈腺H〉を通る（もしくは〈動物精氣〉にかかわる）こと、次に身体の感覚や想像のそれぞれが〈âme〉の〈感じる〉や〈想像する〉という働きかけを受けずに、〈âme〉に〈受動〉としてそのまま受け入れられること、そして〈âme〉の〈感じる〉働きかけが身体の感覚だけに、同様にその〈想像する〉働きかけが身体の想像だけに呼応すること、また〈間接〉とは、まず身体の感覚や想像が〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉を通る（もしくは〈神経〉にかかわる）こと、次に〈âme〉の〈感じる〉や〈想像する〉の各働きかけは身体の感覚や想像の両方に呼応すること、そして〈âme〉の〈感じる〉のわけでも身体の感覚への働きかけは先行の能力に次ぐ働きかけとしてあることに起因すると捉えられる（〈âme〉の〈感じる〉が身体の想像に働きかける場合と〈âme〉の〈想像する〉が身体の感覚や想像に働きかける場合のことはのちに譲る）。だからこれらのいずれかをもって〈直接〉や〈間接〉になる上記の諸能力に、さらに前回⁽⁴²⁾に取り残した〈感情（affection）〉（これは次回に触れる）などや前述した〈作為観念〉での諸能力を加えてみたりすれば、筆者は夏目漱石のいう知・情・意を含め、すでに記した諸能力はデカルトにおいて、当然この〈âme〉でこそ語られることを、しかもその諸能力の各働きかけにあつては時間（的経過）が伴われずにおれないばかりか、この時間（的経過）のもとで各諸能力が何らかの観念をもたらすに不可欠となるにあつ

ては、各諸能力は何度でも（繰返してでも）働きかけてよいことを知るはずである。

① 〈日常的用法〉における〈想像〉について

さてここで筆者は前段に書き記しておいた心身合一について、それは前回⁽⁴³⁾ 感覚によってその成立をみるのであって、想像にはない（感覚の詳細は前回や前段までの内容に譲る）と一言にしていえたが、しからばなぜ想像の方は心身合一を成す能力にないとするのかを質することにある（これにはこれまで取り上げてきた〈直接〉や〈間接〉のことが大いに関係するのであり、その答えはこれらのいずれからしか導き出されないと察知できるからである）。想像には繰返すが、〈直接〉での、身体の想像である〈受動〉としての〈想像〉が、次いで身体の想像に〈âme〉の〈想像する〉の〈能動〉としての働きかけで生み出される〈たんなる想像〉が、またさらに身体的記憶という〈想像〉のほか、身体感覚や想像の両方が〈腺H〉でなしに、〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉を通るこのそれぞれに〈âme〉の〈想像する〉の〈能動〉としての働きかけがあることによって〈間接〉とみなされる際の、身体的記憶という〈想像〉を基盤にしつつ、そこに〈悟性（知性）〉とつながり、〈悟性（知性）〉を手助けする〈想像〉もあった。そこから筆者はまた、〈直接〉の場合の二つの〈想像〉が〈外来観念〉の起因となるし、〈間接〉の場合のかかる〈想像〉は身体的記憶という〈想像〉にとどまるこの〈外来観念〉を除き、〈想像〉が前回の引用文②①から見透かされるように⁽⁴⁴⁾、〈penser〉的要素⁽⁴⁵⁾をもちあわせる場合があるのだから、〈作為観念〉にかかわってくるとみることができたのである。

そこで心身合一のことに触れるに、それは〈作為観念〉より〈外来観念〉のことをもって語らねばならなくなるはずである。なんとなれば〈âme〉にとって身体の想像（や感覚）に真先きに働きかけるのは、今問うている〈想像する〉（や〈感じる〉）であると断じたからである。そしてここで質すは〈間接〉の場合にあらず、〈直接〉の場合が該当する。それは、〈直接〉の場合である〈腺H〉によって、デカルトに〈精神は身体全体に結合する〉⁽⁴⁶⁾と語らせているからである。かつここでさらに注意しておくべきは、〈間接〉の場合の〈âme〉の〈想像する〉がそれでも真先き（最初）に身体の想像（や感覚）に働きかけることになることとされようが、それ自体が〈直接〉の場合の〈âme〉の〈想像する〉と捉え

られることはない、いいかえると両方の、といっても一つでしかない〈想像する〉にとって、これが〈直接〉では身体の想像だけに、〈間接〉では実際のところ身体の想像や感覚のおおのに真先き（最初）に働きかける（ただし〈âme〉の〈感じる〉は〈情念〉を例にし語ったごとく、身体の想像や感覚のそれぞれに真先き（最初）にではなく、二番目の能力となって働きかけることも〈間接〉とみなされる事由の一であったし、むろん以下の本文に〈間接〉の場合として記すこともその事由の一となった）といえども、その同じ働きかけが二つある必要はないということである。だから〈間接〉の場合は〈想像する〉が〈外的感覚器官〉や〈脳の内表面〉の両方にかかわることの方を優先させて語られねばならぬのであり、そこにのみ〈直接〉の場合の〈想像する〉との相違が見出されるのである。

とすれば〈直接〉の場合の〈âme〉での二つの〈想像〉における各〈外来観念〉は、同じ場合の二つの〈感覚〉における各〈外来観念〉をもってまさに心身合一が確信されているとみたのと同様に、当然心身合一があるという証しを示してくるのではなかろうか。だが次の引用文を読むとなると、否と答えるほかなくなってこよう。

ⓧ② Entre les perceptions qui sont causées par le corps, la plupart dépendent des nerfs ; mais il y en a aussi quelques-unes qui n'en dépendent point, et qu'on nomme des imaginations... Telles (ces imaginations) sont les illusions... et aussi les rêveries. ⁽⁴⁷⁾ (括弧内は筆者)

身体によって引き起こされる諸知覚（のなか）の大部分は神経に依存する（五感（官）なる感覚はほぼそうである）。しかし（〈âme〉に受容された）身体の想像と呼ばれて、神経に少しも依存しない諸知覚がある。...このような身体の想像は幻想であり... 夢想でもある。（括弧内は筆者）

ⓧ③ Imaginer n'est autre chose que contempler la figure ou l'image d'une chose corporelle. ⁽⁴⁸⁾ (傍線箇所は筆者)

想像するということは、身体的なものの表象⁽⁴⁹⁾を思い描くことにほかならない。

ⓧ②の〈想像〉は〈âme〉にとって〈受動〉としての身体の想像である。しかしⓧ②で肝要なことは、この〈想像〉は〈神経に依存しない〉と記されていることにある。身体の想像とは〈身体によって引き起こされる諸知覚〉の一つである⁽⁵⁰⁾。これもまた身体感覚と同じように、身体すなわち〈外的感觉器官〉たる身体に受け入れられる知覚であり、まずはその謂であるとしておこう。しかしこの身体と、たとえば〈想像と共通感覚の座である腺Hの表面〉⁽⁵¹⁾とは〈神経〉でつながないとされるそのとき、ここに問題にしている〈直接〉の場合の〈想像〉は、〈想像の座である腺Hの表面〉に果たしてとどくのかである。そこにとどかずば、身体の想像はたんに〈外的感觉器官〉たる身体に受容されるにすぎなくなる（これはむしろ〈間接〉の場合の〈想像〉に供しよう）、つまりはこの身体にとどまる身体の想像は真に〈âme〉の〈受動〉としての想像なる知覚（筆者の別言では反射）になり得ないはずである。この〈âme〉の知覚になり得ないと捉えられるからして、かかる想像なる知覚によっての心身合一は成立不可能であるといつてよいのである。

だが一方で、筆者は前段に掲げた〈身体によって引き起こされる諸知覚〉というⓧ②の〈諸知覚〉の一を端から、〈âme〉の〈想像〉なる知覚と読むこともできるのである。それはこの引用句中の〈身体〉を〈âme〉に置き換え得るからである⁽⁵²⁾。その際、およそⓧ③や、後記しようⓧ⑫の傍線箇所に従えば、それぞれ〈身体的なものの表象〉あるいは〈わたしたちの外部にある諸対象に、及びわたしたちの身体の多様な感情に関係づける諸知覚〉ともなろう身体の想像は、〈身体〉すなわち〈âme〉に〈直接〉受け入れられる〈受動〉としての〈âme〉の〈想像〉になることをだけでなく、そこにはこれを契機にした心身合一があることを意味させずにおかなくなる。

なぜか。ⓧ③の内容さえ含ませる前段ⓧ⑫の引用に関係する身体の各想像が〈âme〉に〈直接〉受容されるとは、各想像がすでに記した〈外的感觉器官〉の神経にかかわったり、そこから〈âme〉につながれていよう神経に伝わったりする必要がない、要はこの各想像は〈少しも神経に依存しない〉ということになるからである。そしてこの身体の想像のことからも、〈直接〉とは〈神経に

依存しない) 謂のみに、また他方の〈間接〉とは〈神経に依存する〉ことに対して適用されねばならない、とどのつまり身体の想像は〈神経に依存する〉か〈神経に依存しない〉かによって、〈間接〉や〈直接〉なる各かかわり方に分けられねばならないというその〈間接〉や〈直接〉の証明がまさに成るといえるわけである(この各かかわり方は〈感覚〉でもおよそ同様であり、そのことは次回に考察する)。

とまれ話を〈直接〉の、いいかえると〈神経に依存しない〉身体の想像のところに戻せば、身体の想像は〈âme〉すなわち〈身体〉たる〈想像...の座である腺Hの表面に描かれる〉⁽⁵³⁾ しかなくなると同時に、これをもって心身が合一されるといい得るはずである。何しろデカルトは、先きの註(46)とその辺りで触れたように、心身合一をばかかか〈腺H〉において認めるのだから。すると筆者が身体の想像による心身合一はないと記しておいたことは訂正されねばならぬのか。そうではない。なぜならデカルトのいう以下のことが心身合一のあることを否定させるからである。

ⓧ④Elles (ces imaginations) ne procèdent que de ce que les esprits étant diversement agités, et rencontrant les traces de diverses impressions qui ont précédé dans le cerveau, ils y prennent leur cours fortuitement par certains pores plutôt que par d'autres. ⁽⁵⁴⁾ (括弧内は筆者)

このような身体の想像が生じるのは、動物精気が多様に動かされたり、脳にすでにある多様な印象の痕跡に出会ったりしつつ、たまたま他ではなく、しかじかの孔を通して脳に流れることにしかよらない。

ⓧ④はⓧ②内の冒頭文章あとに続き、ⓧ②の〈Telles...〉の前に入る一文であり、そこには身体の想像は〈動物精気が...しかじかの孔を通して脳に流れること〉にかかわるということが記される。このとき新たに問われよう〈動物精気〉のことはのちにみるとして、〈受動〉としての想像は、この〈動物精気〉が〈しかじかの孔を通〉ることに従わせられるし、従わせられるとは、身体の想像が〈しかじかの孔〉に受け入れられることであると解しておく。それでも

〈孔〉とは何か、どこにあるものなのか、デカルトがこうも〈孔〉のことを持ち出すに注目してはいかなる役目を担うのか、まず質す必要がある。

ⓧ⑤ Il faut savoir, que les artères qui les (les parties du sang) apportent du cœur, ... se rassemblent autour d'une certaine petite glande, située environ le milieu de la substance de ce cerveau, tout à l'entrée de ses concavités ; et ont en cet endroit un grand nombre de petits trous, par où les plus subtiles parties du sang qu'elles contiennent, se peuvent écouler dans cette glande, mais qui sont si étroits, qu'ils ne donnent aucun passage aux plus grossières. ⁽⁵⁵⁾ (括弧内は筆者)

心臓から血液の粒子を運ぶ動脈は、... 脳の凹みの入口のところの、脳本体のおよそまん中に位置した小さな腺のまわりに集まっている。またこのまわりには多数の小さな孔があって、ここから動脈が含む血液のもっとも細かな粒子がその腺 (ⓧ④では脳と表記) に流れることができる。だが孔はたいへん狭いので、もっとも粗い粒子を通すことがない (ということを知らねばならない)。 (括弧内筆者)

〈孔〉という語はⓧ④で〈pore〉, ⓧ⑤で〈trou〉であるが、両方同義⁽⁵⁶⁾, かつまた〈canal (導官)〉⁽⁵⁷⁾と捉えてよい。だがここではそのことより、〈孔〉は〈血液の粒子を運ぶ動脈〉(導官)であり、しかも〈腺〉すなわち〈腺H〉のまわりを取り囲んで、〈血液の粒子〉が心臓から〈腺H〉に流れるまゝに通るところであると、そしてこのⓧ⑤には何ら〈動物精気〉たる語が見当たらないといえども、動脈(導官)中の〈ces parties du sang très subtiles composent les esprits animaux. (この血液の非常に細かな粒子が動物精気をつくる)〉⁽⁵⁸⁾とさらにほかで語られることをもって、血液(の粒子)が〈動物精気〉であると断じておくことが肝要なのである。註(58)を繰返すか、具体的に展開せしめる引用文としては以下の二つが相当してこよう。

ⓧ⑥ Pour ce qui est des parties du sang qui pénètrent jusqu'au cerveau, elles n'y servent pas seulement à nourrir et entretenir sa substance,

mais principalement aussi à y produire un certain vent très subtil, ou plutôt une flamme très vive et très pure, qu'on nomme les Esprits animaux.⁽⁵⁹⁾

脳に流れる血液の粒子に関しては、血液の粒子が脳でその本体を養い保つばかりでなく、動物精気と名付けられる、ある非常に細かな風を、より正確にいうと非常に活発で純粋な炎を脳で生み出すのに役立っている。

ⓧ⑦ À mesure qu'il en (des esprits) entre quelques-uns dans les cavités du cerveau, il en (des esprits) sort aussi quelques autres par les pores qui sont en sa substance, lesquels pores les conduisent dans les nerfs, et de là dans les muscles.⁽⁶⁰⁾ (括弧内は筆者)

ある(動物)精気が脳の凹みに入るに従って、ほかの(動物)精気は脳本体にある多くの孔を通して出てゆき、これらの孔は(動物)精気を神経に、そして神経から筋肉に導く。(括弧内は筆者)

血液(の粒子)が註(58)の〈動物精気をつくる〉またはⓧ⑥の〈風を、…炎を生み出す〉と語られることは、血液自体が〈動物精気〉になるばかりか、ⓧ⑥とⓧ⑦を読み合わせては、この〈風×炎〉である〈血液〉すなわち〈動物精気〉がさらにどんな特徴にあるかを知り得る。その特徴とは何よりⓧ⑦の〈孔〉をⓧ④の〈孔〉に比較させるならば、前者は後者と異なる働きをする〈孔〉の〈動物精気〉でしかないところに見出されてくるであろう。これらの〈孔〉のことをかりに神経でいう〈遠心性神経〉と〈求心性神経〉⁽⁶¹⁾にたとえると、ⓧ⑦の〈孔〉は〈遠心性神経〉に、ⓧ④の〈孔〉は〈求心性神経〉に見合う〈動物精気〉の流れとしてあるはずである(ただし筆者の考察はこれまでに何度となく指摘していた通り、いわばこの〈求心性〉に、とどのつまりここでは身体の想像がいかにして脳あるいは〈âme〉に伝達されるかに視点が置かれるのであって、脳あるいは〈âme〉から〈筋肉〉へという例での〈遠心性〉を問うことにはないのである)。

それゆえ筆者の考察の〈求心性〉なる視点に立つと、ⓧ⑤の語るものやⓧ⑦

の〈動物精気が脳の凹みに入る〉ということから、〈血液（動物精気）〉は当然、〈心臓×孔×脳の凹み×脳本体〉そして〈腺（H）〉の順に流れよう。だが一方の〈遠心性〉たる〈動物精気〉は〈求心性〉たるその逆の流れになるといえるか定かにならない。なんととなれば⑧⑦に、〈動物精気〉が〈脳本体にある多くの孔を通過して出てゆ〉く〈遠心性〉であると記されるとき、この〈遠心性〉としての出発点は、〈動物精気〉が〈求心性〉の場合の終着となる〈腺H〉ではなく、〈脳本体〉にこそあるとみなさざるを得なくなるからである。そこではしかし、〈脳本体〉の〈孔〉の〈動物精気〉がどのように異種物質である〈神経〉や〈筋肉〉に導かれるのか、いいかえると〈血液〉はいかにこれらの物質と関係するか、つまり〈血液〉なる〈風×炎〉がどうして〈神経〉や〈筋肉〉のなかを通る物質たり得るのか、さらにこの〈動物精気〉には、⑧⑥では脳のみにとはいきや、⑧⑦では〈神経〉や〈筋肉〉に通用する語としてあるに及んで、〈動物精気〉が〈血液〉がゆえにそう語られるのは当然だとするにせよ、しからば〈動物精気〉とし〈血液〉としない効果は奈辺にあるか、などの疑問が生じてくる。だが以上に答えるは筆者の考察の視点をはるかに超えるからしてもはや割愛せずにおれないが、それでも〈脳本体にある多くの孔〉が〈血液（動物精気）〉と〈神経〉との接点になるし、またこの〈遠心性〉においても心身合一がみられることだけは確かであるといっておく。

だから今度は、⑧④の〈しかじかの孔〉や⑧⑤の〈小さな孔〉について語る番となる。この〈孔〉は繰返しているが、〈動物精気〉がそこから〈出る sortir〉のではなく、そこに〈入る entrer〉に充当する〈孔〉なのである。しかれども〈動物精気（血液）〉はこの〈孔〉の中に何を（取り）入れるのか。それはむしろ〈血液〉以外ではあり得ない。とすればそこには、少なくともその〈血液〉に含有されるところの、⑧⑫の〈わたしたちの外部にある諸対象に、及びわたしたちの身体の多様な感情に関係づける諸知覚〉が、いいかえると筆者が今だに問い続けている身体の想像（実に身体の感覚もこれと同様に把握できるといえよう）がその〈孔〉に受け入れられるであろう。なぜなら⑧④にあって、この〈知覚〉の一なる身体の〈想像〉は、〈動物精気〉が〈脳に流れる〉にしても（この〈脳〉はしかし〈脳本体〉また〈腺H〉のいずれかをさすか明確ではないが）、〈孔〉を通らずして生まれえない、これをさらにいうと〈孔〉でしか生まれえないと読み得るからである。

だがここでもやはり不可解なのは〈知覚〉があたかも〈血液〉となつて捉えられるかのようにあることである。果たしてそれでよいのか。たとえば〈血液〉は、㊦④の〈多様な印象の痕跡に出会ったり〉、㊦⑫の〈身体の多様な感情に関係づけ〉たりして、身体の想像たる〈知覚〉に変化させられるのであろうか(㊦⑫の〈身体の...感情〉という後者の語は affection であるが、筆者は一方で何度となく身体感覚と記す場合もあったので、この語を「症状」や「経過」の意でなしに、かつ〈âme〉の能力として使用されるだけにとどまらずに、〈身体感情〉の意に訳しておく(それは次回に明らかとなる)と付加する)。この想像の語はもとより、引用文㊦⑤、㊦⑥や㊦⑦に表記されることは一度としてない。にもかかわらず、もし〈血液(動物精気)〉が〈多様な印象の痕跡〉や〈身体多様な感情〉によって変化せしめられると、あるいは上記三つの引用文中の語〈動物精気〉や〈血液(の粒子)〉のおのおのを〈知覚〉に置換させることができるというならば、おそらくかかる変化の一である〈知覚〉こそ〈孔〉に受容される身体想像(もしくは身体感覚)なのであり、また同時にこの身体想像や感覚がそれぞれ、その〈孔〉において〈âme〉の〈想像(imaginationのimagination化)〉や〈感覚(sensのsentiment化)〉になるほかないであろう(ただしこの〈孔〉はまた〈導官〉とも記されるだけに、〈âme〉ないしは〈脳〉(身体)を果たして構成するものとみなし得るかであるが、デカルトでは不問になっている)。とはいえこれが〈孔〉の役目であり、さらに〈神経に依存しない〉という〈直接〉の場合になるのである。

そこで以上から、〈神経に依存しない〉身体想像や感覚は〈孔〉中の、〈わたしたちの外部にある諸対象に、及びわたしたちの身体多様な感情に関係づける諸知覚〉たる〈血液〉であるともはや結語せずにおれないのである。するとさらに、身体想像や感覚にとっては、これらのそれぞれが〈直接〉〈受動〉として受け入れられる先きは、〈血液(動物精気)〉が㊦⑤の〈腺に流れる〉とされるところの最後の〈腺H〉ではなく、その手前に位置してあろう〈孔〉であると断じてよいことになる。さすれば同時に語ってきたこと、すなわちかの〈腺H〉にあってこそ、心身合一が成立するということがここでも再度前提になり、かつデカルトに強調されてやまないとみるかぎり、この〈求心性〉での一場所たる〈孔〉における心身合一が認められなくなるのは当然なのである。それゆえデカルトが〈孔〉のことを念頭から切り離さず、しかもそれに固執する

かにみえるだけに、筆者は〈直接〉〈受動〉として〈孔〉に受容される身体の想像（もしくは身体の感覚）での心身合一はないとする見極めをつけられるばかりか、上記のことにおいて心身合一はないことを明らかにし得たといえるわけである。

そうすると今度は、心身合一が果たしてデカルトにみられるのかどうか確かめられなくてはならない。その確認にあつては何より引用文㊦③を参照する必要があるものであり、かつ㊦③を理解するうえでは、もはや〈直接〉における〈受動〉（身体の想像や感覚が〈孔〉に受容されてその各能力になること）の場合がではなく、すでに提示しておいた引用文㊦⁽⁶²⁾に記されるような場合、すなわち同じ〈直接〉にあつても、〈理性的精神（âme）が何らかの対象を想像したり感じたりする〉というこの〈âme〉の〈imager〉や〈sentir〉が身体の想像や感覚としての〈何らかの対象〉に働きかける場合が条件となっていない。さらにこの際知っておくべきは、まず註(62)の引用中の〈何らかの対象〉とは前記したことでいうと、〈外部にある諸対象〉に〈身体の多様な感情〉に〈関係づける諸知覚〉、要するに上記の文章でいえば、〈何らかの対象〉を形容する語の身体の想像や感覚であること、そしてこの身体の想像や感覚が〈孔〉に受け入れられるとき、それぞれ〈âme〉の想像（imaginationのimagination化）や感覚（sensのsentiment化）になるとしたが（今〈âme〉のと記す以上、〈孔〉は〈âme〉あるいは〈脳〉（身体）を構成するものとみなすほかなくなる）、それでも同じ〈孔〉において、〈âme〉の想像や感覚とはなり得ない身体のimagination（想像）やsens（感覚）があること、しかもこれらのおのおのはたんに〈孔〉を通るにすぎず、そのまま〈腺H〉まで流れてゆくであろうということである。

そこでかかる場合にこそ、心身合一が成るといえるのである。およそ心身合一が成立するのは繰返してでもいうが、身体の想像や感覚のそれぞれに対して、〈âme〉の〈想像する〉や〈感じる〉が働きかける場合なのである。心身はいかにして結合されるかは㊦③を例に用いて次の段落でみるにしても、筆者はこの心身合一の成立に関し、上記した〈場合〉に立つかぎりには、これまでに述べてきた点、すなわち〈受動〉（の〈日常的用法〉）や情念（の〈日常的用法〉）のおのおのをして順次心身合一における〈全体的関係〉や〈部分的関係〉⁽⁶³⁾を構築せしめるというこの各語句に表記した点はここに改められねばならぬことに

気づかされる。訂正すべきところはいうまでもなく、〈受動〉(の〈日常的用法〉)にあると同時に、その心身合一はないと先きに断じたのだから、〈直接〉での〈受動〉による心身合一が〈全体的関係〉にあるなどというも論外なのである(しかるに〈全体的関係〉を築く心身合一がないわけではない。それについても次の段落に譲る)。また情念(の〈日常的用法〉)の方は、筆者はこれを主に〈間接〉の場合とみているから、〈部分的(もしくは間接的)関係〉を築く心身合一があるという際のこの語句の使用はその〈間接〉に対し許されよう(なお〈直接〉の場合にも情念はある。このことは前記しておいた〈身体の…感情〉を例にして次回に触れる予定である)。

その㊦㊧を参考にしよう。冒頭語〈imager〉からわかることは、〈imager〉が引用文㊦註(62)中の〈理性的精神(âme)〉の能力、しかしして㊦㊨と㊦㊩中に示唆される身体の想像のみに働きかける能力でなければならないことであり、しかも〈imager〉は〈直接〉のことに限定されて用いられることである。するとそこから、まず身体の想像はすでに指摘した通り、〈求心性〉としての〈動物精気〉が流れるままに、〈孔×脳の凹み×脳本体〉をこの各順に通って〈腺H〉に達するであろうことが想定できる。そして〈âme)の〈imager〉と解する以上、〈imager〉が〈âme)に配置されるその部位を上記中の〈脳本体〉にみると捉えておくならば、〈imager〉はこの〈脳本体〉を起点にしてはじめてといえるほどに、〈腺H〉にある身体の想像に働きかけることが可能となり、そこに筆者のいう〈たんなる想像〉が生じるであろうことが予想され得るのである。しかしなぜか。それは、働きかけるという〈imager(想像する)〉はいわずと知れたこと、〈能動〉でしかないのであって、かかる〈能動〉がゆえに、この働きを〈腺H〉に達しよう〈動物精気〉の流れに添わせつつ(この〈能動〉はだから逆流、つまり〈遠心性〉では決してない)、〈腺H〉(引用文㊦⁽⁶⁴⁾)を持ち出して明確にいえば、この〈腺H〉は〈想像…の座である腺H〉となろう)中の身体の想像にかかわり得ると理解されるからである(この〈想像する〉はだから、〈想像(imagination)…の座〉に組み入れられるのを身体の想像⁽⁶⁵⁾となし、その身体の想像のみに働きかけると記し得たわけである)。それゆえ〈âme)の〈能動〉である〈想像する〉が身体の想像に働きかけることによって、精神としての〈imager〉と身体としての〈imagination〉との結合による心身合一が、とどのつまりこの精神と身体をはじめて合一せしめる

意味で、全体的関係を構築するといえる心身合一が成立することになる（ここにこそ心身合一が成立するとみるのは、たとえばその精神と身体を比べた際、おそらく精神を優先させるにちがいないデカルトにとって、この精神の働きかけがなされないかぎり、心身結合さえままならないと筆者には察知されるからである。だからまた前記していた〈受動〉としての想像を例にしては、身体の想像がいかに精神（*âme*）の想像になると語られようが、その身体の想像のことだけをもって、デカルトは心身合一を成り立たせるわけにはゆかなかった（むしろここでの心身合一はないと断じたが）ともいっておかねばならぬのである）。

それにしても㊦㊢の傍線箇所中の語（*image*）は筆者に、その〈表象〉と訳したことに拘らないとすると、なぜか、〈*âme*〉の〈*imaginer*〉の働きによって〈*âme*〉の〈*imagination*（たんなる想像）〉が生み出されるという際のその〈*imaginer*〉や〈*imagination*〉からの派生語のように映るのである。少なくとも〈*image*〉はデカルトでは〈*imagination*〉そのものであるといえる。それはとにかく、〈*âme*〉の〈*imaginer*〉が何に対して働きかけるかと再度みるならば、もとより、㊦㊡での〈神経に依存しない〉身体の想像に、しかも〈直接〉の場合であるにしろ、㊦㊣での〈孔〉における〈受動〉としての（身体の）想像ではまったくなしに、㊦㊢で暗示されよう（腺H）に達している身体の想像に対して、〈*âme*〉の〈*imaginer*〉が働きかけるということであろう。その結果この〈*imaginer*（想像する）〉は〈身体的なものの表象を思い描く〉わけである。これは先きに触れたような〈表象〉をしてたんなる想像（*imagination*）たらしめることと同じことになる。しかしながら、たとえば〈外部にある諸対象〉や〈身体の多様な感情〉と書かれた㊦㊤を引くことによって、〈*chose corporelle*（身体的なもの）〉は前者から〈物的なもの〉、後者から〈身体的なもの〉を含意させると、だから㊦㊢の当の傍線箇所にあつては両者の〈表象を思い描くこと〉になるとみなしてよいが、それでもこのたんなる想像は、果たして㊦㊡の〈受動〉としての（身体の）想像がもたらす〈幻想×夢想〉につながる各〈表象を思い描くこと〉にあるのか、はたまたこれらとは無関係な〈表象〉となるのかである。もともと㊦㊡と㊦㊢は個別の作品であるからして、当初よりその各引用文が関連するというのは無理としても、そこをかりに、㊦㊡の身体の想像にみた〈幻想×夢想〉が㊦㊢に暗示される（腺H）に流れるとす

るならば、これらのそれぞれにかかわる〈表象〉を〈imager〉は〈思い描くこと〉ができようし、流れずば〈想像する〉はむしろこれらを不可能にさせるのであって、これらと異なる〈身体的なものの表象を思い描く〉かざるを得ないのであるという、ここはそれこそそうした推測をしか〈思い描く〉けないのである（すなわちこの点は筆者がデカルトの諸作品に目を通しつつも、デカルトが明確に打ち出すことをおよそ読みの浅さからなのか読み取れないままにしているということである）。

そしてさらに、前段までの〈直接〉の場合の〈受動〉としての（身体の）想像あるいは〈âme〉の〈imager〉による想像（たんなる想像）のこと以外に、デカルトは次のように記すであろう。

ⓧ⑧Que les imaginations qui ne dépendent que du mouvement fortuit des esprits, peuvent être d'aussi véritables passions que les perceptions qui dépendent des nerfs.⁽⁶⁶⁾

動物精気の偶発的な運動にだけ依存する想像は、神経に依存する諸知覚と同じく文字通りの受動に属していること。

この引用文は『情念論』（26節）の小見出しに相当する。だがそこに何が意味されるのか。以下にその私的解釈を試みる。〈神経に依存する諸知覚〉とは、ⓧ②中の〈身体によって引き起こされる諸知覚（のなか）〉の大部分は神経に依存する」という文章を再提示するまでもなく、〈大部分〉の意を代表させよう感覚になる。それに〈文字通りの受動〉と書かれるからして、この感覚も最終的には〈âme〉の感覚にみられるにせよ、まずは身体の感覚として〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉⁽⁶⁷⁾に受容されるにちがいない。なんととなれば〈大部分〉の身体の感覚は何より〈神経に依存する〉からである（註(67)の両器官のあいだは神経でつながれているし、また各器官にも神経がなければならぬはずである）。そしてこの身体の感覚の例と同じであるのが〈想像〉なのだとデカルトはいう。しかもこの〈想像〉は〈動物精気の偶発的な運動にだけ依存する〉と記される。ならばこの〈想像〉は、かかる引用に依拠される能力、いいかえると、すでにみた〈直接〉の場合における二つの想像、すなわち〈孔〉における〈受

動)としての(身体の)想像と〈腺H〉における〈âme〉としての想像と異なる能力でしかならう。だから二つの想像の〈動物精気〉の〈運動〉をたとえばその「正常な運動」とみなして、〈動物精気の偶発的な運動にだけ依存する想像〉と比べると、後者はもとよりその「正常な運動」に依存しない想像となるのである。それゆえ、引用文㊦㊧なる註(66)全体から意味されることは、後者の想像は〈神経に依存する諸知覚(大部分の感覚)〉と同様に捉えざるを得ない能力であり、〈神経に依存する〉からして、〈文字通りの受動〉としての身体の想像、つまりは〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉の各器官(とはいえまず視聴覚をはじめとする外的感覚器官)に受け入れられるという意味での〈受動〉としての身体の想像以外ではない、いいかえると身体の想像にとつての〈動物精気〉の〈偶発的な運動〉は、〈動物精気〉をその「正常な」〈血液〉ではなく、あたかも〈求心性〉における〈神経〉としての〈運動〉のようになるほかないということにある。

これこそ、身体の想像が〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉にかかわることをもって〈間接〉になると筆者が語ってきた当のことに充当させずにおかない。こうして引用文㊦㊧なる註(66)によっては、〈神経に依存しない〉、別言すると〈動物精気〉に依拠するところでの〈直接〉の場合以外に、要はこの〈神経に依存する〉ところという〈間接〉の場合があること、また〈間接〉における想像がある(この想像は〈想像に手助けされた悟性(知性)〉につながる想像である)ということが確実となったのである。ただし〈間接〉とは、何よりもまず〈外的感覚器官〉の〈神経〉に〈文字通りの受動〉となつて受容され、なおも〈脳の内表面〉の〈神経〉に達した身体の想像に対して、〈脳本体〉をして〈âme〉中の〈âme〉たらしめるといえるその〈imager〉がかかる〈âme〉の〈神経〉を通して働きかけることをさしていよう。そうだとすると、

㊦㊧Elles (ces imaginations) n'ont pas une cause si notable et si déterminée que les perceptions que l'âme reçoit par l'entremise des nerfs.⁽⁶⁸⁾ (括弧内は筆者)

このような身体の想像は、精神が神経を介して受け入れる諸知覚ほどに顕著で明らかな原因を有しない。

からして(〈このような身体の想像〉は〈精神が神経を介して受け入れる諸知覚ほどに顕著で明らかな原因を有しない〉)にもかかわらず、〈精神 (âme) が...受け入れる〉ところの身体の想像であるばかりか、〈受け入れる〉とされる以上は、前記もしたように、精神の〈imaginer〉が〈能動〉として身体の想像に働きかけては精神の想像になるということはこの引用文からも確かである)、あるいは〈このような身体の想像〉は〈(les impressions) vives et expresses (強烈で鮮明な諸印象)〉⁽⁶⁹⁾ ではないからして、〈大部分〉の感覚(五感(官)や内臓感覚)における、〈精神が神経を介して受け入れる諸知覚〉のように、〈顕著で明らかな原因〉もしくは〈強烈で鮮明な諸印象〉に基づくのではなしに、かかる諸知覚の(『l'ombre et la peinture (影や画)』)にすぎないと語られている。すなわち、

ⓧ⑩ (Pour ce qu'...) elles (ces imaginations) semblent n'en (des perceptions) être que l'ombre et la peinture, avant que nous les (ces imaginations) puissions bien distinguer, il faut considérer la différence qui est entre ces autres. ⁽⁷⁰⁾ (括弧内は筆者)

このような身体の想像はかかる諸知覚の影や画でしかないように思われるから、わたしたちがこのような身体の想像をよく見分け得るにあっては、かかる際立った(つまり顕著で明らかな原因を有する)諸知覚のうちに潜む相違に注意をしておかなければならない(ということである)。(括弧内は筆者)

〈このような身体の想像〉とは筆者がⓧ⑨やⓧ⑩のみか、ⓧ②やⓧ④の訳文にて用いた語である。しかしながら、その訳語をもとにする前者ⓧ⑨やⓧ⑩と後者ⓧ②やⓧ④の内容はそれぞれで異なるとみておくことが肝要である。要するにかかる内容は二つに分かれる各用法を示唆させるのである。それはいわずと知れたこと、筆者のいう〈直接〉や〈間接〉の各場合における〈想像〉の用法でしかない(身体の想像とこの〈想像〉との表記の相違は後述で明確にする)。(直接)の場合の〈想像〉の用法となるのはⓧ②とⓧ④であると、その〈想像〉には〈受動〉としての想像や〈たんなる想像〉があると読み取れたし、このどちらがⓧ②の〈幻想〉ならびに〈夢想〉に充当するかをデカルトは定かにして

いないとここでもいうにせよ、筆者がこの〈幻想〉と〈夢想〉をば少なからず〈直接〉の場合において捉えることだけは認容されてよいと指摘できるのである。

それに対して、〈間接〉の場合の〈想像〉の用法となるのは㊦㊧と㊦㊨である。この〈想像〉は、これをたとえば㊦㊧に記される〈動物精気の偶発的な運動にだけ依存する想像〉と換言させていうに、まさにこの〈偶発的な運動〉によって〈神経に依存する×想像〉になるとみられるからして、もはや〈孔〉や〈腺H〉にかかわる〈動物精気（血液）〉に従われるのではなく、〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉にかかわる〈神経〉に〈文字通りの受動〉として受容されるであろうが、しかし実のところ〈偶発的な運動〉に基づいているだけに、㊦㊧での〈精神が神経を介して受け入れる〉、〈顕著で明らかな原因を有〉する〈諸知覚〉に比べて、㊦㊨に記されるように、〈かかる諸知覚の影や画〉にすぎなくなるわけである。

だがこの〈想像〉が〈かかる諸知覚の影や画〉になるとは何か。それはもとより〈想像〉が〈かかる諸知覚〉そのものに該当するのではないことを、それでもそこには〈影や画〉たる〈想像〉をもたらさずにいない〈想像〉の用法があることを意味させよう。しかしてこの用法はそのことだけにとどまるのかが問われる。なんとすれば、デカルトが〈画〉のことでは〈être trompé（だまされる）〉⁽⁷¹⁾というにあって、〈画〉たる〈想像〉がこの〈だまされる〉から少しでも解放すべき能力の一面を含んでいるのでなくば、たえず〈だまされる〉ままにいるほかないと自問させるからである。〈想像〉にこの一面としての能力なかりせば、デカルトの主張しよう〈わたしたち〉は、この能力をもってかの〈真理〉を獲得し得ないと当然知っていても、まったくその〈真理〉に近づくことさえできなくなろうし、かといって〈だまされる〉ままでは何んらの〈真理〉とも関係しない存在になる以外になかろう。いやそれどころか、この能力を欠いた〈想像〉にとって〈画〉だけでなく、〈影〉すらも、筆者のいう〈現実に見えないもの〉⁽⁷²⁾を見るまでにさせることはあり得ないと断じておかねばならないのである。

しからば〈想像〉のこの能力は何であろう。それにはデカルトによる、〈想像に手助けされた悟性〉⁽⁷³⁾との記述が参考にされる。この記述は今質す〈想像〉にとって、〈悟性〉を手助ける〈想像〉とも読み換えられる。するとこの〈想

像)はたんに〈影や画〉たる〈想像〉に終始しないことが察知され得る。その一面こそ〈悟性〉を手助けする能力にちがいない。〈悟性〉を手助けする以上は、この能力が〈思惟する〉という〈悟性〉に近いものでなければならない。かくしてこの能力も〈想像〉に含まれるとみるがゆえに、〈想像〉は〈悟性〉に橋渡しされる、いいかえると〈想像〉のこの能力が〈悟性〉への仲介を司どることになる。そこで〈橋渡し〉や〈仲介〉の例として、前記した〈影や画〉のことを取り上げ、これらの言葉の真意が奈辺にあるかを語ってみよう。それは〈影や画〉のままでなしに、それぞれをば〈顕著で明らかな試みをなすとき〉にあっては、〈想像〉のこの能力自身が少なくとも〈思惟する〉ことに導かせる先きがけを果たし、そのことをもって、これもまた同じ自然的諸能力でしかない〈悟性〉もしくは〈知性〉そして〈理性〉へとつながらなければならぬところに見出される。以上のことはすでに前回⁽⁷⁴⁾〈キマイラ〉を持ち出して指摘したことに通じるのであって、後段にて以上のことに関係して語る以外、もはや繰返しの必要はなからう。ただ〈悟性〉については、次のことだけが記されよう。

たとえば〈疑う〉や〈理解する〉などの働きかけがどうして〈わたしたち〉に生じてくるかを、今度はこの〈悟性×知性〉や〈理性〉の側からみるとき、デカルトにあっては、何よりもまず〈悟性(知性)〉における〈認識の起こり〉⁽⁷⁵⁾としての最初で唯一といってよい契機は、この〈間接〉の場合の〈想像〉に〈向けられて〉あるということなのである。そしてさらに、たとえ〈真理〉に達し得ずとも、この〈想像〉や〈悟性(知性)〉で得られるにもまして、その何らかのことの〈顕著で明らかな原因〉を探るために、まさにこのときの出番を待っていたかのような〈理性〉に引継がれることが欠かせなくなるのである。しかし、この〈理性〉と〈悟性(知性)〉との関係はともかく、これまで語ってきた二つの〈想像〉やのちにみる〈情念〉になる〈想像〉と〈悟性(知性)〉との関係は、以上のかぎりではない。すなわち、〈直接〉の場合における〈受動〉としての想像や〈たんなる想像〉という二つの〈想像〉と、〈間接〉の場合における〈情念〉になる〈想像〉のそれぞれに対しても、確かに〈悟性(知性)〉は働きかけるのであるが、それでもこの各関係には、要するに三つの各〈想像〉に対する〈悟性(知性)〉のあいだには、瞬時ではない〈時間〉が経過されてあるということである。だから〈悟性(知性)〉が〈時間〉をおいて三つの各〈想像〉とかかわらざるを得ない点で、三つの〈想像〉と今問う〈間接〉の場合におけ

る〈悟性〉を手助けする〈想像〉との相違がみられることになる。だがそうはいいつつも、三つの各〈想像〉が生じたあとに、〈悟性（知性）〉なる能力では同じであろうかあの〈想像に手助けされた悟性〉が関与するときがあるやもしれぬと想定される。しかしながら筆者は、すでに触れたところからいって、あの〈想像に手助けされた悟性〉の役割は何はさておき、この〈間接〉の場合における、これも筆者の命名である〈悟性を手助けする想像〉への働きかけにあると、そのうえで〈想像に手助けされた悟性〉の〈観念〉をそれこそ〈時間〉をかけて、〈きわめて明晰に判明に理解する〉ように、〈手助け〉を必要としない〈悟性（知性）〉や〈理性〉の各能力に委ねさえすればよいとみるだけである（またのちにわずかに質す（詳細は次回に譲る）精神（âme）の感覚についても、〈悟性（知性）〉の感覚への働きかけはこれらのあいだに〈時間〉を経過させて可能になろうと指摘しておく。ただその〈悟性（知性）〉とは、感覚との関係を問うにあっても、当然感覚に（手助けされた悟性）、または〈想像に手助けされた悟性（知性）〉ではないことだけは確かなのである（デカルトの作品には、感覚に手助けされた悟性という表現は見当たらない）。このことから、〈想像に手助けされた悟性（知性）〉は〈悟性（知性）〉と名称が同じであるといえども、両者は異なりをみせていると捉えておかざるを得なくなる）。

さて以上のほかに、筆者にとっては〈間接〉の場合における〈想像〉に該当して、もう一つの用法となる〈想像〉のことがみえてくる（これは前記した〈情念〉になる〈想像〉のことである）。これが記されるのは以下の引用文である。

⑩Or, encore que quelques-unes de ces imaginations soient des passions de l'âme, en prenant ce mot en sa plus propre et plus parfaite signification, et qu'elles puissent être toutes ainsi nommées, si on le prend en une signification plus générale. ⁽⁷⁶⁾

さて、このような身体の想像のある一つは、精神の情念という語をこのうえなく特殊な意味にとっても、精神の情念に属するであろうし、この精神の情念という語をさらに一般的な意味にとるならば、このような身体の想像はすべて同様に精神の情念と呼ぶことができるであろう。

この㊦㊩は『情念論』の21節中の一部分の文章であって、実は㊦㊨と㊦㊪のあとに続き、なおまた㊦㊩と㊦㊫の両方の前にくる引用文なのである。要するに21節（の全文章）の構成は最初が㊦㊨、次いで㊦㊪、㊦㊩、㊦㊩と㊦㊫の順次で成り立っている。だがその順序を覆してまで、21節全体が筆者により切り刻まれたのはなにゆえかである。それはもはや承知のごとく、㊦㊩㊦㊩㊦㊫の〈想像〉の意味内容が、㊦㊨と㊦㊪のそれとは異なることによるからである。どう相違するかここで再度明確にしておく必要がある。㊦㊩の冒頭の接続詞〈or〉（別の問題の提供に用いられる）から㊦㊩と㊦㊫での〈想像〉は、筆者のいう〈間接〉の場合における〈想像〉、つまり㊦㊨の〈動物精気の偶発的な運動〉をして〈神経〉に依存せしめると捉えられるのも含んでデカルトに語られる〈神経に依存する×想像〉なのであって、筆者が㊦㊨と㊦㊪でいう〈直接〉の場合における〈想像〉、つまりデカルトのいう〈神経に依存しない×想像〉とは違っていなければならないのである。そうでなければ、デカルトはなぜ㊦㊫に、〈このような身体の想像をよく見分け得る〉こと、そのために〈かかる際立った諸知覚のうちに潜む相違に注意〉することと記すのであろうか。これが㊦㊨と㊦㊪でみる〈想像〉と同じ意味内容でしかないとき、㊦㊩以下はすでに不要以外の何ものでなかろう。

以上を踏まえながら、筆者が㊦㊩にみるとした〈想像〉のもう一つの用法は、そこに記される言葉通り、〈想像〉が〈精神の情念に属す〉こと、いいかえると〈情念〉になることにある。しかもこの〈想像〉における〈情念〉が、感覚における情念以外のその用法としてあること、かつ感覚についてその多くは次回に語る際と同様、〈間接〉においてだけでなしに、〈直接〉においてもみられるということである（〈想像〉における〈情念〉と感覚における〈情念〉とは何かをこれから問うに当たって、それでもこの〈想像〉と感覚をここに同時に取り上げようとするのはなにゆえなのか。それは、㊦㊩が前記したかくなる位置にある引用文に捉えられるからして、ここでの〈passion〉たる語は、しかも複数形であるだけに、もはや㊦㊨や㊦㊪から暗示された〈受動〉の訳に充当するのではなく、〈情念〉の訳でなければならぬし、これゆえに、今質す〈想像〉における〈情念〉（〈passion〉の複数形はかかる〈情念〉に〈間接〉や〈直接〉があることによる）ばかりか、これまでの拙論にて何度か証明したいと記しつつも、いまだ証明せずにいた感覚における〈情念〉の一面（これは〈間接〉の場合にお

ける〈情念〉である)を含めてまとめられるのは、これ以降の場所よりほかにないとか知されるからである。だからさらに感覚における〈情念〉へとつないでいくうえでも、筆者はこの21節の一続きの文章全体をば、筆者なりの意図のもとで五つに分けるという切断を試みざるを、なかでもこのⓧ⑪をそれなるがために最後に配置せざるを得なくなったわけであり、ⓧ⑪を最後の配置となすことにこそ、この切断の最大の事由があったといつてよいのである)。

そこで筆者はⓧ⑪を参照にしつつ、前段の前半(括弧内以外)の部分に述べた内容を明かす必要に迫られる。それにむけて以下のことが確認されねばならない。まず21節全文を通し記される、つまりⓧ②、ⓧ④、ⓧ⑪、ⓧ⑨とⓧ⑩なる各引用文中にある〈ces imaginations〉は注意すべきとはこれまで明記せずにいたが、当初から精神の想像と受け取るのでなしに、身体の想像の意味にすべて解することが肝要とされる。なんとすれば、21節全文は〈Des imaginations qui n'ont pour cause que le corps (身体だけを原因とする想像について)〉⁽⁷⁷⁾という小見出しに関連せずにおれないからである。次に上記のことから、ⓧ②の〈身体によって引き起こされる諸知覚〉には、この諸知覚のおのおのが〈神経〉や〈動物精気〉のいずれにかかわるか、あるいはそれぞれがどれほどの種類を有するのかは別にして、〈想像〉(身体に関与する〈想像〉は四種類である(身体的記憶という想像も含めると五種類になろう))があると、かつこれ以外には感覚だけがあるということが明確にされる。なんとすれば、デカルトが〈Des perceptions que nous rapportons aux objets qui sont hors de nous (わたしたちが自分の外部にある諸対象に関係づける諸知覚について)〉⁽⁷⁸⁾もしくは〈Des perceptions que nous rapportons à notre corps (わたしたちが自分の身体に関係づける諸知覚について)〉⁽⁷⁹⁾と記すにあって、両註の〈知覚〉とはもっぱら感覚のことをさし⁽⁸⁰⁾、感覚は〈身体によって引き起こされる諸知覚〉の他の一つとみなされてかまわないからである。そしてⓧ⑪からは、前段の前半部分で〈想像〉が〈情念〉になると筆者に語らせたように、〈想像〉のもう一つの用法が見出されることが、しかもかかる用法が二つにわたることが窺える。なんとすればⓧ⑪は、〈このような身体の想像のある一つ〉が、またその〈ある一つ〉以外の〈このような身体の想像〉がそれぞれ、〈特殊な意味〉での、〈一般的な意味〉での〈精神の情念〉になることを示唆させずにおかないからである。

ところでこの〈精神の情念〉の形成に当たって、〈このような身体の想像〉が役立つ能力であるといえるが、しかしデカルトが㊦㊩でその〈ある一つ〉とそれ以外と記すかのごとくある以上、かかる形成に該当しよう〈このような身体の想像〉とは〈ある一つ〉とそれ以外とに応じた能力に限定されると捉えられるはずである。別言するとこの身体の想像より生じる〈想像〉には、〈受動〉としての想像、〈たんなる想像〉、〈悟性〉を手助けする想像と今取り上げている〈情念〉になる想像があるとみていたわけだから、これら四つの〈想像〉のうちから、〈ある一つ〉とそれ以外とに見合う〈想像〉を適宜当てはめることが課せられるということである。それら二つの〈想像〉のそれぞれが必然的に〈特殊な意味〉あるいは〈一般的な意味〉での〈精神の情念〉になるのである。それでは、この一つの〈想像〉が当然のこと、〈情念〉になる想像であるにしても、〈情念〉になる想像は〈特殊な意味〉と〈一般的な意味〉での二つの〈精神の情念〉の形成に寄与するのか、それともこのどちらかのみに相当するといえよいかである。

その際、筆者が21節中の㊦㊩（ならびに㊦㊨や㊦㊩）を何んと断じたかを想起さえするならば、〈情念〉になる想像は両方ではなく、一つの〈精神の情念〉の形成にこそ役立てられることを知るであろう。すなわち、㊦㊩以降で記される〈想像〉は繰返すが、〈神経に依存する×想像〉、または〈間接〉の場合における〈想像〉なのであり、これによるからして、わけでも㊦㊩の〈想像〉は一つの〈精神の情念〉の形成に貢献するし、この一つの〈精神の情念〉は〈特殊な意味〉でのそれになるしかない、それゆえかかる〈精神の情念〉は〈情念〉になる想像において可能となるのであって、この〈情念〉になる想像はむしろ〈間接〉に組み入れられずにおれなくなるとみることができるのである。

ここで〈間接〉というのは、〈情念〉になる想像にあって、まずは身体の想像〈imagination〉が〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉（身体の想像も身体感覚と同様、この〈外的感覚器官〉たる名称の身体器官に受容されるほかない）の各神経とかかわること、次に身体の想像が精神（âme）とみなしてよい（脳の内表面）の神経に達するなかで、これも同じく精神とみられる（脳本体）中の〈能動〉たる一能力〈想像する imaginer〉が（脳本体）の〈神経を介して〉、〈脳の内表面〉の神経に働きかけること（これが身体の想像が精神の〈想像 imagination〉となることであり、筆者が何度も表記したが、これまで明かさ

ずにきた〈想像〉の謂なのである),そしてそこからこの〈想像〉をして〈情念〉たらしめるには,精神の〈想像〉に〈脳本体〉中のこれも〈能動〉たる一能力である〈感じる sentir〉がさらに,〈imager〉のときと同じ神経回路を辿って働きかけること(これがまさに〈情念〉になる想像であると,身体の想像とかかわらずにいないこの〈情念〉になる想像を〈精神の情念〉となす(このために〈情念 passion〉は〈精神 âme〉でしか生じない)と語らせる)をさすことになるからである。

再度いうが,〈情念〉になる想像は四つの〈想像〉の一であり,かつこの一なる〈想像〉(〈情念〉になる想像)に精神の〈sentir〉が働きかけるとなるやいなや,かかる〈想像〉は〈精神の情念〉になる。だからことを一なる〈想像〉によってだけでなく,この〈情念〉の形成自体の方に立たせてみても,そこでかわる〈sentir〉は〈imager〉を先き立たせるからして,一なる〈想像〉に起因してこよう〈情念〉は〈間接〉に対応する以外にないといえるのである。さらにことを一転させて,この一なる〈想像〉がたえず〈情念〉になるかどうかを質とするならば,おそらく〈情念〉になるときは,〈sentir〉が〈imager〉のあと瞬時に〈想像〉に関与するし,〈情念〉にならないときは,精神の〈情念〉になる想像でなしに,たんに想像としか語られないであろう。だが今度はこの想像は何かと問えよう。今取り上げている〈想像〉は上記した一なる〈想像〉(〈情念〉になる想像)と同じように,〈間接〉の場合における〈想像〉に組み込まれていなければならぬのだから,これに充当する〈想像〉はもはや筆者のいう〈悟性〉を手助けする想像のほかにはないであろう。そうだとすると,しかしこの同じ〈間接〉における〈悟性〉を手助けする想像は,〈精神の情念〉になることはないといえる。なんとすれば,かかる〈悟性〉を手助けする想像はこの〈想像〉自体に,〈sentir〉でなしに,〈疑う douter〉や〈理解する concevoir〉などの悟性,知性,理性としての能力を課して成り立っていたからである。それゆえ先きに問うた想像はたえず〈情念〉になる以外にないからして,〈情念〉になる想像であり,それとしてのみ成り立つと結語し得るのである。

ただ〈間接〉すなわち〈神経に依存する〉とみなされる場合,精神の〈imager〉が身体の想像ばかりでなく,身体感覚に,あるいは精神の〈sentir〉がこれも身体想像のみか,身体感覚に各働きかける(ここでは身体想像に關す

ることだけが質される)とすでに語ったところからは、デカルトにみた、この〈情念〉になる想像や〈悟性〉を手助けする想像にあって、それはもとより前者では精神の〈sentir〉が、後者ではたとえば精神の〈douter〉がそれぞれ、精神の〈想像〉のおおもとである身体の想像に働きかけることを意味すると捉えてよかろうが、しかしその際、この身体の想像への精神の〈imager〉の事前の働きかけ抜きで、要するに実際の精神の〈想像〉の形成なしに、前者の〈sentir〉や後者の〈douter〉がおのおの身体の想像に即座にかかわり得るのかどうか、それでも万が一に両者の各能力が身体の想像に関与したとみれば、それぞれの能力は〈情念〉になる想像を、〈悟性〉を手助けする想像を成立させ得るのかどうか、はたまた両者の各能力が身体の想像に関与したあとに、精神の〈imager〉の働きかけが瞬時にあり得るのかどうか、なおまた左記のことが〈情念〉になる想像や〈悟性〉を手助けする想像のおのおのになり得るのかどうかに対する各解答がデカルトに提示されてはいないといわなければならないのである。しかしかかる提示を試みないのは当然、デカルトが〈情念〉になる想像や〈悟性〉を手助けする想像のそれぞれへの、本段落中の〈しかしその際〉と記した以降における各組み合わせはないと判断するにほかならないからである。だからこれにより、〈情念〉になる想像や〈悟性〉を手助けする想像という各想像は精神の〈想像〉(身体の想像にまずは精神の〈imager〉が働きかけること)を形成させたうえで、しかるべきおのおのの精神の〈sentir〉や〈douter〉が同じ精神の〈想像 imagination〉に関係するしかない(たとえばこの〈想像〉に〈sentir〉が働きかけると、〈sentir〉によって、〈想像〉が〈情念 passion〉になろう)ということが証明されたといえるのである。

ところで以上のごとくなると、一方の〈一般的な意味〉での〈精神の情念〉は、すでにして〈間接〉における〈想像〉で、つまりは〈情念〉になる想像や〈悟性〉を手助けする想像でかたちづくられていることはない、それゆえもしやかかる〈精神の情念〉は、引用文㊷㉒や㊷㉔の場合の〈神経に依存しない×想像〉によって、または〈動物精気〉に依存する〈想像〉によって、または〈直接〉における〈想像〉によってしか生み出されはしないのではないのか。しかしである。だがそうであっても、前記した〈直接〉における〈想像〉の一になる〈受動〉としての想像からは、およそ〈精神の情念〉は生じてこないであろう。なんとなれば、以前みたことを踏まえると理解されるように、〈受動〉とし

での想像が〈精神の情念〉になり得ないのは、身体の想像が〈動物精気（血液）〉に従って伝えられるといえども、〈腺H〉でなしに〈孔〉に流れ、しかもこの〈孔〉に受容された身体の想像がそこでそのまま〈受動〉たる能力（imaginationのimagination化、あるいは前記した通り、デカルトが不問にしたといえる、〈孔〉をば精神とみるならば、精神の〈想像〉になろう）となる、とどのつまりは精神（âme）である〈脳本体〉中の能力〈imager〉どころか、〈sentir〉の働きかけさえないことによるからである。すると、〈一般的な意味〉での〈精神の情念〉にかかわる〈直接〉における〈想像〉は、他の一としてある〈たんなる想像〉を充当させる以外になくなるわけである。

〈直接〉とはこの〈たんなる想像〉において、何より身体の想像が〈動物精気〉によって精神（âme）である〈想像…の座である腺H〉に達し、〈脳本体〉中の〈能動〉たる能力〈imager〉が〈腺H〉にある身体の想像に働きかけて、精神の〈想像 imagination〉（これをして〈たんなる想像〉という）になることをもって、要は身体の想像が〈神経〉とではなく、〈動物精気〉とかかわることをもって語られたのである（ここで㉖⁽⁸¹⁾に立ち返って〈直接〉や〈間接〉のことをまとめておこう。そこに〈理性的精神（âme）が何らかの対象を想像したり（imager）感じたり（sentir）するとき〉とある。だから一方で、〈理性的精神〉の〈能動〉たる能力〈imager〉や〈sentir〉がそれぞれ、〈外的感覚器官あるいは脳の内表面〉の〈神経に依存する〉と同時に、〈何らかの対象〉の基となる身体の想像や身体感覚の両方に働きかけねばなくなる（これまで述べてきた通り、たとえば精神（むろん理性的精神と同じこと）の〈imager〉がかかる〈神経を介して〉身体の想像にかかわるとみるは、これ自体をして〈間接〉の場合があると語らせる証明になろう）し、他方で、〈たんなる想像〉を問題にしたがゆえに、それらの能力のうちの〈imager〉が、〈想像…の座である腺H〉の〈動物精気〉に依存すると同時に、〈何らかの対象〉の基となる身体の想像のみに働きかけなければなくなるのである（精神の〈imager〉（これは〈間接〉の場合と同じ能力であるとされても、以下に記すごとく、〈動物精気〉に関して用いられる点ですでに上記と相異する能力と理解しておくべきである）がかかる〈動物精気〉を介して身体の想像にかかわるとみるは、これ自体をして〈直接〉の場合があると語らせる証明になろう）。すなわち、㉖を例にすることで筆者が強調させたいのは、この㉖は精神の〈想像す

る imaginer) や〈感じる sentir) がかかる〈神経) や〈動物精氣) における身体の想像や身体感覚にともに働きかける用法を有するとデカルトが暗示させることによって、〈間接) や〈直接) の各場合が作り出されているということなのである。だから以上が⑤において、デカルトがいわんとした一になる(⑤での他は〈観念) や〈表象) という各語が何を意味するかであり、筆者の解明課題となる)。ただし繰返すが、その⑤にあって〈理性的精神が直接考察する) (傍点部分はとどのつまり〈思惟する) (要は〈想像したり感じたり) して、このそれぞれが精神の〈想像) と〈感覚) になる) ことに換言される) というこの〈直接) の場合は、身体の想像には精神の〈imaginer) が、身体感覚には精神の〈sentir) (これは次回の課題であった) がかわるしかないことは注意されなければならない)。

そして、前段で述べた〈たんなる想像) が〈精神の情念) たらんとすれば、どうなるかをもう一度ここで確認せずにおれないであろう。それは、〈想像... の座である腺Hの表面に描かれる表象) でしかないこの〈たんなる想像) に、さらに〈脳本体) 中の〈能動) たる能力〈sentir) が〈動物精氣) を介して瞬時に働きかけることが〈精神の情念) になること、つまり〈精神の情念) が〈腺Hの表面に描かれる表象) として生み出されていることであった。これがまさに〈一般的な意味) での〈精神の情念) なのである。だからこの〈一般的な意味) での〈精神の情念) と、前記した〈特殊な意味) での〈精神の情念) (これには〈情念) になる想像が起因した) とにあっては、前者の〈情念) が〈直接)、後者の〈情念) が〈間接) にみられるとの明確なる区別が必要なのであり、この区別をしてそれぞれ、もとよりデカルトに〈一般的な意味) と〈特殊な意味) との区別を成立たらしめたといえるのである。だからして、前者のこと、いいかえると〈たんなる想像) による情念はもはや〈たんなる想像) だけからでなく、この〈情念) の方からいっても、〈直接) の場合に呼応すると断じることが可能になるのである。要するに、〈一般的な意味) での〈精神の情念) とは〈直接) の場合における〈情念) であり、しかしてこの〈たんなる想像) による情念によっても、〈たんなる想像) について語ったところで指摘しておいたと同様に、この形成と同じ〈動物精氣) とその回路を繰返したどるにすぎないのだから、当然そこで心身合一が成るとみておかねばならぬことが、つまりは精神の〈sentir) と身体想像による〈たんなる想像) との心身の合一がか

かる〈想像〉の前提のうえで唯一可能となることが結語される。

とまれ〈想像〉の分析をここで終えるに当たっても、次のことだけは再確認しておかねばならない。すなわち、これまで語ってきたなかの、〈受動〉としての想像を除く、他の〈たんなる想像〉、〈悟性〉を手助けする想像と〈情念〉になる想像という三つの想像では、精神のこの各〈想像 imagination〉が身体の想像への精神の〈imager〉の働きかけによってもたらされることがまさに共通したことであると、だがそれでいて、〈受動〉としての想像もここに加えていう四つの想像の用法がそれぞれ、何らの矛盾もなく打ち立てられていたということである（四つの想像の各用法の区別なくば、各想像は当然同じ用法になるだけであって、それこそ矛盾のままにとどまざるを得ないからである）。同じ名称の単語でしかない〈想像〉に四つに分かれる用法を保持させ、しかも各用法をして整合性たらしめるにいかなる気負いもなく、あたかも人知れずにたんたんと書き記すかにみえるこの点は、まことに見事な出来ばえというほかなく、デカルトの卓越さによるところであろう。だから、筆者はその多くの見解を『情念論』から見出し得たといえる一方で、当の『情念論』にはなるほど新しい主張も盛り込まれていると捉えられども、それよりデカルトがこれまでの諸作品で語り続けてきた思想のまとめが試みられていると、かつそのまとめとは前記していた〈想像〉の例からして、要はこの〈日常的用法〉の思想の方が、〈神経〉や〈動物精気〉とまったく無関係なところにて語られるいわゆる〈真理の探求〉の思想よりはるかに具体性をもって論じられることにあつたと、それゆえデカルトの卓越さはこの〈日常的用法〉の具体的な思想（今日的にはその限界があろうとも）の表現にこそあると理解せずにおれないのである。なんとすればこのことはまた、〈感覚〉に対しても同じようにいえるからなのである。

② 〈日常的用法〉における〈感覚〉について

たとえば、〈情念〉になる想像と〈たんなる想像〉という二つの想像から、それぞれの〈情念〉が形成される以外に、〈感覚〉によって形成される〈情念〉のあることが、次なる引用文で確かめられよう。

ⓧ⑫ Les perceptions qu'on rapporte seulement à l'âme sont celles dont on sent les effets comme en l'âme même, et desquelles on ne connaît

communément aucune cause prochaine à laquelle on les puisse rapporter: tels sont les sentiments de joie, de colère, et autres semblables, qui sont quelquefois excités en nous par les objets qui meuvent nos nerfs, et quelquefois aussi par d'autres causes. Or, encore que toutes nos perceptions, tant celles qu'on rapporte aux objets qui sont hors de nous que celles qu'on rapporte aux diverses affections de notre corps, soient véritablement des passions au regard de notre âme lorsqu'on prend ce mot en sa plus générale signification, toutefois on a coutume de le restreindre à signifier seulement celles qui se rapportent à l'âme même, et ce ne sont que ces dernières que j'ai entrepris ici d'expliquer sous le nom de passions de l'âme.⁽⁴²⁾ (傍線部分は筆者)

わたしたちが精神 (âme) にだけ関係づける諸知覚は、わたしたちが精神自体のうちにその結果を感じる諸知覚であるが、その結果を関係づけ得るもっとも近い原因を通常何も認めることはない諸知覚である。歡喜、怒りやその他似たような感覚 (sentiment) がそうなのである。これらの感覚はときおり、わたしたちの神経を動かす対象によって、また別の原因によっても、わたしたちに引き起こされる。さて、わたしたちのすべての知覚は、わたしたちがわたしたちの外部にある諸対象に、及びわたしたちの身体の多様な感情 (affection) に関係づける諸知覚も、わたしたちが情念という語をもっとも一般的な意味にとるとき、わたしたちの精神に照らしてまさに情念といえようが、しかしわたしたちには情念という語を精神自体と関係がある諸知覚だけの意味に制限して(捉える)習慣があるし、わたしが精神の諸情念なる名のもとにここ (『情念論』) で説こうと企てたのは後者の諸知覚にほからないのである。(傍線部分と括弧内は筆者)

〔続〕

今回は本文に関係した㊦㊧を引用文として提示するだけにとどめる。それは、この筆者なりの見方を記すも本論稿での(A)①〈想像〉についてと同様に、かなりの紙数を必要とすることが予想されるからである。それゆえ、今回は

(A)②〈感覚〉(そして感覚による、あるいは感情による〈情念〉)について。③〈悟性(知性)や理性〉について。

から論じ、さらに

(B)いわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉の主要な能力とは、かつその〈esprit〉をして〈同じ一つの精神〉たらしめるとは何か。

(C)筆者のいうもう一つの〈真理の探求〉の esprit の主要な能力とは、かつその esprit をして〈同じ一つの精神〉たらしめるとは何か。

を順次問うていかなるを得ないであろう(なお(B)と(C)のことは、(A)のようなそれぞれの小見出しを今は付加させずにおくが、各項目の検討に当たっては、もとより本論稿の㊦①の内容に立ち返ることを前提としておかねばならないのである)。

註

今回の参考文献は以下の通りであり、各註はその文献に付した記号A.ーD.に従う。

A. 新潟大学人文学部人文科学研究

㊦ 『シモーヌ・ヴェーユにおける感受性の基礎的研究の証明と展開』Ⅳ、第90輯、1996年。

㊧ 『なぜ感受性なのか』(1)、第91輯、1996年。

㊨ 同上(2)、第93輯、1997年。

㊩ 同上(3)、第94輯、1997年。

㊪ 同上(4)、第95輯、1998年。

㊫ 『デカルトにおける理性と感覚』(3)、第99輯、1999年。

㊬ 同上(4)、第101輯、1999年。

B. Descartes 《Œuvres Lettres》Bibliothèque de la Pléiade. Gallimard.

㊭ 《Méditations》

㊮ 《Objections et réponses》

㊯ 《Traité de l'homme》

㊰ 《Les principes de la philosophie》

㊦ 《Les passions de l'âme》

C. 《Dictionnaire des synonymes, analogies et antonymes》, Bordas.

D. 夏目漱石『草枕』(近代文学注釈大系), 吉田精一(校訂・注釈・解説), 有精堂, 1965年。

- (1) A.㊦(諸引用文とはそこでの㊦①, ㊦②, ㊦③, ㊦④, ㊦⑤の記号に基づく引用文をさす) 参照。
- (2) A.㊦P. 66。
- (3) B.㊦Cinquièmes réponse, P.P.502-503。
- (4) これを容認すると, 心身二元論は崩壊する(A.㊦P.61㊦P.46も参照)。
- (5) B.㊦Premières objections, P.335 (なおこれは司祭カルテスによる反論とされる)。
- (6) これと同様な引用文はA.㊦㊦①㊦②と㊦③である。
- (7) A.㊦P.87参照。そこに新たな精神とは〈両精神を兼ね備えた精神(筆者はこの精神を鉤括弧抜きの esprit とみる)〉であると記したのは, 周知のように, まずデカルトが使用する精神の用語には〈日常的用法〉用の〈âme〉やいわゆる〈真理の探求〉用の〈esprit〉しか見当たらないなかでは, そして筆者にとってその精神をのちの本文に語る〈独自の理性〉の視点から, あるいは観念論的一元論に立つ立場から, 〈esprit〉にみておかねばならないし, かつまたそこに新たなと形容されるがゆえに, 精神はその〈esprit〉ではなしに, espritでなければならなくなるからである。
- (8) B.㊦P.289。
- (9) B.㊦P.290。
- (10) B.㊦P.290。
- (11) A.㊦P.85, P.89, P.P.97-98参照(そこには〈独自の理性〉のことが記される)。
- (12) 筆者は次回以降, 〈想像するために, ある特殊な緊張を必要とする〉という例文と『情念論』のなかで, 筆者が名付ける〈知的愛〉に関する例文とを提示し説明するが, これらは本文の〈imaginer〉や〈sentir〉の各働きかけをも可能にさせる新たな精神においてしか成り立たないことを分析する予定である。
- (13) A.㊦P.P.27-29参照(筆者はそこにシモーン・ヴェューの引用文㊦㊦㊦を取り上げておいた。もとより㊦㊦㊦は彼女によるデカルト思想の理解に基づくが, この理解こそ筆者にとって, 彼女が新たな精神に立つがゆえに生まれるとみることができる。要するにこれらの引用文からも, 彼女はデカルトが精神(引用文中での〈わたし〉)や㊦の〈意識〉という表現に換言されてよい)に感覚を受け入れることを認めざるを得ないのである)。

- (14) A.㊦P.P. 72-81参照 (そこではシモーヌ・ヴェーユのいう〈感受性 sensibilité〉に対して、カントのいう〈感性Sinnlichkeit〉とは何かのカントの認識論の基本的思想をみることに終始しているが、次回以降にはのちの本文に問題点を記しておくように、デカルトのいう感覚とカントのいう〈感性〉の比較検討が試みられねばならぬと考えている。)
- (15) A.㊦P.P. 53-56参照。
- (16) B.㊦P. 559。
- (17) 身体感覚 (sens) あるいは身体想像 (imagination) がたとえば〈直接〉に、〈間接〉にそれぞれ精神 *âme* でかかわるという分析について、前者感覚のことはA.㊦P.P. 68-77を、後者想像のことはのちの本文を参照。なお自然的理性はこの感覚や想像のおおのの〈受動〉に、時間的経過をもって〈作為する×能動〉のことを意味させよう。
- (18) 註(12)とのちの本文を参照のこと。
- (19) A.㊦P.P. 1-2参照。
- (20) 筆者は註(19)の引用文㊦㊧のみか、同じくA.㊦P.P. 1-2にある㊦㊧と㊦㊨さえ、いわゆる〈真理の探求〉と同時に、〈日常的用法〉でのそれぞれの〈esprit〉や〈*âme*〉の各〈思惟〉たる諸能力をさすだけでなく、〈独自の理性〉あるいは〈知的愛〉を可能となす新たな精神 *esprit* の〈思惟〉たる諸能力をあらわすと理解している。なんとすれば、たとえば㊦㊨は(そこに〈*esprit*〉が使用されるからして)いわゆる〈真理の探求〉のみの諸能力を示唆させると捉えられようこの精神に対して、デカルトは本来排除されるべき〈感じる *sensir*〉すら含ませ、そのうえで〈同じ一つの精神〉と見立てているとすれば、㊦㊧の〈愛する×憎む〉や㊦㊨の〈感じる〉能力の実際の作用がないとみられる以外の精神〈*esprit*〉の能力は、これら㊦㊧㊨の能力の作用があるとされる〈日常的用法〉の〈*âme*〉と区別するために、超自然的能力として扱われるであろうが、しかし今上記したと同じ諸能力のあることが、超自然的諸能力や自然的諸能力になるかどうかは別にして、他の精神(〈日常的用法〉における〈*âme*〉)ともう一つの〈真理の探求〉における *esprit* にあっても、他の精神が精神と名付けられている以上は不可欠なのであって、この点で他の精神もまたそれぞれ〈同じ一つの精神(〈*âme*〉と *esprit*)〉になると語られるほかなかりうし、わけてももう一つの〈真理の探求〉における新たな精神 *esprit* は、〈*âme*〉と〈*esprit*〉の各諸能力と、これら各諸能力と関係しよう〈独自の理性〉ならびにその〈知的愛〉たる能力とをいっしょにさせて成り立つ〈同じ一つの精神 *esprit*〉でもあるとみることができからである。そしてこの新たな精神を見出し得るかぎり、デカルトのいう精神はもはや新たな精神 *esprit* だけに代表されると断じられねばならない。それゆえ本論稿はこうしたなかでの〈日常的用法〉での〈*âme*〉

の、いわゆる〈真理の探求〉での〈esprit〉の、もう一つの〈真理の探求〉での esprit と筆者がみなしたところの諸能力の各分析でしかなくなる(本論稿最後の〔続〕以降の文章参照)のである。

- (21) A.④P.P. 97-99参照。本文にも記した通り、いわゆる〈真理の探求〉での超自然的理性はその〈作為観念〉を試みつつ、知的(超自然的)〈生得観念〉の獲得をめざすのに対し、デカルトが真にめがけ、これをして筆者にいわしめるもう一つの〈真理の探求〉での〈独自の理性〉は要するに、超自然的理性でありながらも、いわゆる〈真理の探求〉のその働きに与するだけにとどまらず、現実の事物に関係し、いわばその現実の事物たる〈生得観念〉の獲得をもめざすところにある能力になるということである。
- (22) 自然的理性は確かに身体感覚(もしくは身体の想像)にかかわるといっても、espritではなしに〈âme〉の一能力としてかかることになるだけである。そしてまたこの〈âme〉の自然的理性への〈独自の理性〉の働きかけをもって、新たな精神 esprit における心身合一が成立するとみるのではない。そうではなく、自然的理性を含む〈âme〉に産出された諸能力による各〈外来観念〉や〈作為観念〉に対して〈知的愛〉が働きかけることが、新たな精神にとっての〈真の心身合一〉を成すことであると強調せずにおれないのである。
- (23) (B)(C)とは、ここも本論稿最後の〔続〕以降の文章中の(B)(C)をさすのであるが、このまとめはしかし次回に譲るしかないと断わっておく。
- (24) D.P. 1「山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」とあるなかの「智」「情」「意(地)」が以下の本文の傍点に相当してこよう。
- (25) 本文に補足していうと、カントでは、精神における感覚はそれこそ括弧内の感性の語に置換されようし、さらに感性には感情の意味も伴う場合があろうが、今回はそれらのことを明かすのはさし控える。ただこれらと比較するに、デカルトでは、精神(〈âme〉)の感覚は sentiment なる語で用いられ、これを感性的ないしは感受性(sensibilité)の語に、また感情の語に置換させることはないといえる。少なくとも感情はデカルトの用語においては、affection であり、sentiment ではない。
- (26) A.③P.P. 1-2参照。その引用文①①と①②とにあるように、たとえば〈理解する×意志する×想像する〉などがそれぞれ、悟性(知性)や理性、意志、想像と名付けられる能力の働き(働き自体も能力とみてよい)に該当すると捉えられる。
- (27) A.③P.P. 2-4参照。そこからたとえば、〈思惟(する)〉が諸能力の働き全体(ないしは全能力)をさすことにならないと、〈âme〉(あるいはまた〈esprit〉)は一つの精神であることが不可能になる。

- (28) 註(26)と註(27)に続けていえば、〈âme〉にあっても、①①と①②における主要な能力の働きが成り立っていないければならぬし、そこから①①と①②は〈esprit〉だけに該当するのではない、〈âme〉としての〈同じ一つの精神〉に見合う内容を保持している必要がある。
- (29) 本文のちに一部(想像のみ)記すように、身体の感覚や想像は〈âme〉の〈思惟(する)〉中の〈感じる〉や〈想像する〉に〈直接〉や〈間接〉に、またその〈意志する〉や〈理解する〉などに関係してくるといえる。そしてここからはさらに、〈意志する×理解する〉などを働きかける〈自然的理性〉は〈âme〉の主要な能力の一になり得るし、だからしてこれによる〈âme〉のなかでの〈作為観念〉がなくてはならないという必要がある。
- (30) ㊦と㊧の〈わたしたち〉という主旨は、たとえその〈わたしたち〉が〈精神〉あるいは〈思惟〉と換言されることが許されたとしても、〈わたしたち〉はもはや〈esprit〉やこの〈思惟〉ではなく、〈âme〉やこの〈思惟〉であるとみなしておくことにある。
- (31) A.⊖P.P. 1-2参照(たとえば①①にデカルトは〈疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、なおまた想像し、感じるものである(①①には感覚すると記されるが、それを感じると訂正する)〉)というが、これらを〈âme〉の諸能力としてみる場合、本文にも述べたごとく、かかる諸能力が〈想像する〉や〈感じる〉だけであるとすると、〈なおまた〉の前に語られる諸能力(この際は〈âme〉のそれであるからして、すべて自然的諸能力となる)、すなわち意志、悟性(知性)や理性(による働きかけ)が活かされてはこないのである。またいわゆる〈真理の探求〉にとってもみられるであろう同じ諸能力において、しかし〈想像する〉や〈感じる〉の働きかけが実際ないことはいうまでもないことになる)。これに関しては本論稿の註(26)(27)(28)(29)も参照。
- (32) A.ⓅP. 73とP. 79参照。両頁に〈想像に手助けされた悟性〉と記してあるが、筆者はこの〈悟性〉を自然的悟性あるいは自然的知性ともみなす。なお〈想像〉の方は〈esprit〉ではなく、〈âme〉で〈想像する imaginer〉が実際に働きかける結果生まれる能力である。それゆえ〈想像〉にかかわる(自然的)悟性(知性)があるというわけである。
- (33) デカルトの諸作品からは、〈作為観念〉はいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉で産出される用語としてのみ用いられると読むことができる。いいかえると、〈日常的用法〉の〈âme〉での〈作為観念〉のことが読み取れなくなるということである。しかしながら筆者には、この〈âme〉が本論稿註(32)の(自然的)悟性(知性)や註(16)の〈自然的理性〉によるとみてよい〈作為観念〉を含んでいないと、〈âme〉自体が成り立ってこない、とどのつまり〈âme〉も〈esprit〉と同じ〈同じ一つの精神(âme)〉にみられはしないと捉えられる。〈作為観念〉

は再度いうが、〈âme〉にあっても〈作為する（作り出す）〉ことで成る〈観念〉である。だからこれなくば、〈âme〉は〈外来観念〉だけを産出させる精神になってしまうし、本論稿註(31)の例のごとく、〈自然的〉〈悟性（知性）〉や〈自然的理性〉がだけでなく、なおさら〈理性的精神（âme raisonnable）〉（たとえばA.①P.68引用文⑦参照）が〈âme〉にかかる用語として活かされてこないであろう。また①①や①②での〈疑う×理解する〉などの〈自然的〉〈悟性（知性）〉や〈自然的理性〉が〈日常的用法〉における感覚や想像と同じくらい主要な諸能力となってこの用法の〈âme〉に適用されないとすれば、その〈âme〉の諸能力とは何か疑問になるばかりか、〈âme〉はもはや精神とさえいわれなくなるのではなかろうか。〈esprit〉の諸能力とは確かに〈超自然的〉と形容されることによって、〈âme〉のそれらと異なりをみせるといえども、〈âme〉は精神として〈esprit〉と同じく、〈同じ一つの精神（âme）〉になるがゆえに、〈âme〉に〈作為する〉自然的諸能力（悟性（知性）や理性）が不可欠であるといえる（それどころか、次回以降に証明する通り、〈作為観念〉は以上のほかにもある（〈作為観念〉のことに関係してこよう註(8)(9)(10)から推察されることである）とみることができる。それゆえ筆者は、デカルトが〈作為観念〉という用語一つに、三つの内容を有する〈作為観念〉を秘めることになったと捉えておくのである）。

- (34) A.①P.P. 54-55参照。そこではいわゆる〈真理の探求〉ともう一つの〈真理の探求〉との関係における〈きわめて明晰に判明に理解する〉という文章の見方が語られる。だが本論稿の〈âme〉においては、この文章は以下に記すごとくにつえ得る。すなわち筆者はこの文章を〈きわめて明晰に理解する〉と〈きわめて判明に理解する〉に分けることでは上記と同じであるとしても、その文章での前者は自然的悟性（知性）の、後者は自然的理性の役割になるとみなすことができるのである。
- (35) A.①P.P. 69-70も参照。本論稿に問う〈情念〉はさらに〈âme〉の〈感じる〉が働きかけて形成されるから、〈情念〉自体は〈その形成からみると〉、〈判断する〉や〈意志する〉能力の働きかけ後に成るという意味で〈間接〉によりもたらされるとみる（なおこの証明は次回に譲るが、〈âme〉にとりわけ〈感じる〉能力があることから、前記した①①や①②の諸能力は、何もいわゆる〈真理の探求〉の〈esprit〉のそれらになるとみられるだけではなく、〈日常的用法〉の〈âme〉の諸能力に当てはまらねばならぬといえるのである。要するに〈âme〉もまた〈âme〉用の〈同じ一つの精神〉でなければならないということである）。また〈情念〉は最終的に〈感じる〉がかかわる、つまり感覚に関するからして、〈外来観念〉とみなし得る。
- (36) A.①P. 71も参照。〈記憶〉における〈意志する〉はまず身体感覚や想像に

〈âme〉の〈想像する〉が関係した後に働きかけて、〈記憶〉を成り立たせる能力である。筆者は〈意志する〉ことも〈作為する〉ことの意と捉えるから、最終的に成る〈記憶〉は〈作為観念〉とみることにする。

(37) A.㊦P.P. 53-54参照。

(38) A.㊦P.P. 53参照。

(39) A.㊦P. 75, P. 82, とくにP. 96参照。

(40) A.㊦P. 68引用文㊶参照。

(41) この経緯はA.㊦P.P. 69-77に詳しい。

(42) A.㊦P. 75参照。そこに〈腺H〉での〈直接〉の〈感情〉や〈情念〉は次回に検討する)とある。

(43) A.㊦P. 72とP.75参照。両頁とも二段落目以降が該当する。

(44) A.㊦P. 82, 下から13行目〈一方〈間接〉の場合〉以降参照。

(45) A.㊦P. 83とP. 88参照。

(46) B.㊦ART31, P. 710 〈(Bien que) l'âme soit jointe à tout le corps〉。《情念論》にはこの例以外に、ART32, ART137などが心身合一の説明としてある。このART31がここに取り上げられるのは、〈腺H〉のことも記されるからである。

(47) B.㊦ART21, P.706。

(48) B.㊦P.P. 277-278。

(49) ㊸㊳中の〈la figure〉は〈かたち〉, その〈l'image〉は〈像〉という訳も確かに可能であろうが、筆者はA.㊦P. 68に引用した㊶のfigureを、また㊶㊱(P.77)のimageを〈表象〉と訳したので、統一させるうえでここでも〈表象〉と記すことにする。

(50) 〈知覚〉についてはすでにA.㊰P. 21にまとめてある。この引用における〈知覚〉は想像の場合、たとえば〈外的感覚〉や〈内的感覚〉と同種の知覚であって、本文のちに記す通り、〈âme〉に達する知覚さえもさすと察知できる。

(51) A.㊦P. 68引用文㊶参照。

(52) B.㊦ART25, P.707 〈Des perceptions que nous rapportons à notre âme (わたしたちがわたしたちの精神に関係づける知覚について)〉という25節の小見出しが意味する通りである。また25節の本文のことは、本論稿の最後に掲げる引用文㊸㊴を参照。

(53) A.㊦P.68引用文㊶中の語句参照。

(54) B.㊦ART21, P. 706。

(55) B.㊦P. 813。

(56) C.P. 984。

(57) B.㊦P.821。

- (58) B.㊥ART10, P. 700.
- (59) B.㊤P. 813. なおこの引用文は㊥㊤註(55)のまえにある文章である。
- (60) B.㊥ART10, P. 700.
- (61) A.㊤P. 53あるいはP. 63註(26) 参照。
- (62) A.㊤P. 68引用文㊤参照。
- (63) A.㊥P. 55-57参照。
- (64) A.㊤P. 68引用文㊤参照。
- (65) 註(64)の引用文㊤には、たとえば〈共通感覚の座である腺H〉なる語句があるが、その際〈共通感覚〉が〈sens commun〉であるからこそ、この〈sens〉は〈âme〉における〈sentir (感じる)〉と関係する身体の感覚の意味でなければならぬと読み取れる。だからこれと同格に、すなわち〈想像 (と共通感覚) の座である腺H〉と書かれる〈想像 imagination〉もまた、身体の想像を含意させていなければならぬのである。
- (66) B.㊥ART26, P. 708.
- (67) A.㊤P. 68引用文㊤参照。
- (68) B.㊥ART21, P. 706. なおこの引用は㊥㊤註(76)のあとに続く文章である。
- (69) B.㊥ART26, P. 708.
- (70) B.㊥ART21, P. 706. なおこの引用は㊥㊤註(68)のあとに続き、21節の最後を飾る文章である。なおまたこの引用文にある〈影や画〉という表現は26節でも見受けられるが、デカルトはその26節においてさえ〈影や画〉たる諸感覚があることを主張している。
- (71) B.㊥ART26, P. 708.
- (72) A.㊤P. 82参照。
- (73) A.㊤P. 73参照。
- (74) A.㊤P. 81-84ないしはP. 88参照。
- (75) A.㊤P. 39あるいはA.㊤P. 18 P. 20とP. 21参照。
- (76) B.㊥ART21, P. 706.
- (77) B.㊥ART21, P. 706. またはA.㊤P. 69参照。
- (78) B.㊥ART23, P. 706, その小見出し。
- (79) B.㊥ART24, P. 707, その小見出し。
- (80) これは註(78)の23節と註(79)の24節における各本文の内容の中心が、各小見出しが〈諸知覚〉と記されるといっても、感覚について語られているとの判断を前提にしている。各引用文の解明が要求されるであろうが、この感覚に関することは、本論稿中の㊥㊤なる引用文註(82)に代表させて解明するつもりである(ただしこの試みは次回に取り上げざるを得ないと断っておく)。また感覚についてはA.㊤P. 35引用文㊤を、A.㊤P. 5引用文㊤を参照。

- (81) A. ㊦P. 68引用文㊧のこと。
- (82) B. ㊦ART25 (全文), P.P. 707-P. 708。